晴れ、時々嵐！？

碧井 嘉貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
晴れ、時々嵐！？

【Ｎコード】
Ｎ１９９７Ｄ

【作者名】
碧井　嘉貴

【あらすじ】
幼馴染みの瀬川光と春日月乃。二人の距離は友達以上、恋人以下。そんな彼等に朗報です。今日のお天気は荒れ模様、二人の恋占いは絶好調？

プロローグ

夢を見た。

今から九年前、僕達がまだ小さく、幼かったあの日の夢。

互いの親に連れられて、水族館に来ていた、あの日の夢……。

ある水槽は、海洋のイメージ。水面からの光を反射させている、様々な種類の回遊魚。流れに従いゆらゆら揺れ動く海草。岩場でひっそり佇んでいる甲殻類。

はたまた、こっちの水槽は南国のイメージ。赤、黄色、オレンジ、青。舞い踊っている宝石のような魚達。そして、その魚達に劣らぬほど、鮮やかな珊瑚礁。

本来、自然の中に身を置く魚達が、水族館の小さい水槽の中で、その生命を育んでいる。食物連鎖から外れたこの空間特有のライフスタイル、と言った所であろうか。

実際に泳いでいる魚を見る機会は少ない。それ故、手軽に見ることができる水族館に足を運ぶ人は多い。

あの日もまた然りである。

始めは父さん達が、僕達を注意深く見ていた。しかし、幼き僕達

が父さん達の目を擦り抜けことるなど、いとも容易い。

気付いたら、彼女と二人きりだった。正確に言うと、僕達は父さん達からはぐれ、迷子になっていたのである。

この時の僕の性格はマイペースもマイペース、とても大雑把であったため、適当に待っていたら捜しに来るだろう、適当に見て回っていたら捜しに来るだろう、と軽く思っていた。

しかし、当時の彼女の性格は心配性（不安になり易いと言ったほうが正しいが）であったため、父さん達とはぐれたことに気付くや否や、辺りをキョロキョロ見渡し、辺りをウロウロ歩き回った。終いには、僕の腕をひしと掴み、どうしよう？　と困り顔。

見て回って、見通しのいい所で待ってよう。そう提案するも、彼女は首を縦に振らない。

理由を聞いてみると、行き違いになるよ、とのこと。なるほどと思った。その場で待つことにした。

しかし、所詮は小学生。直ぐに飽き、次の水槽へ。また直ぐに飽き、次の水槽へ。

気付いたら、彼女は僕以上にはしゃいでいた。自分から一ヶ所にいよう、と言っていたのに、と思ったが、直ぐにどうでも良くなった。

――彼女の笑顔が凄く輝いていたから。

そうしてあちこちを見て回っていると、突然拳骨が降ってきた。頭を擦りながら振り向くと、額に青筋を浮かび上がらせた父さんと、あらあら痛そうね、と笑っている母さん。

気付いたらはぐれていた、と弁解したが聞く耳を持たず、公の場であるということを忘れさせるほど怒られた。

そのまま首根っこを掴まれ、ズルズル引きずられて帰った。

これが残念な思い出だったか、というとそうではない。むしろ、いい思い出と言ったほうが正しい。

理由を上げると、あの後に彼女が自分が悪いと、僕を助けようとしてくれたからだ。

あの日以来、僕と彼女との距離はずっと近付き、高校二年生になった今でも同じ距離。

幼馴染みだったという理由はあるのだろうが、あの日がなかったら恐らく今の僕達の関係はなかったと思う。

あのちょっとした迷子に感謝である。

――ガチャリ

おっと、もう来てしまったみたいだ。

足音が近付いて来て、ミシミシと床が鳴る。因みに彼女が重い訳ではない。我が家が古いのだ。

「おはよう、光(こう)ちゃん♪　今日もいいお天気だね」

彼女のお出ましである。因みに彼女は僕の“彼女”ではない。誤解なさらぬよう、宜しくお願いします。

第1話　目覚めて

「おはよう、月乃」

月乃の顔を見ながら挨拶。

彼女はカーテンを勢い良く開け、眩しそうに目を細める。軽く体を伸ばした後、クルリ、こちらを向いて一言。

「さあ起きた、起きた！　今日は始業式なんだから、早く行かなきゃだよ」

まるで母親のような言い草に苦笑い。急かされるように着替えを済せ、共に階段を降りた。

「いただきます！」

「どうぞ、召上がれ」

月乃とご飯になった生き物に感謝し、朝食にありつく。

月乃は毎朝、こんな感じに僕を起こして、朝食を作ってくれる。

以前悪いと思い、大変だから来なくてもいいよ、と言ってみた。すると泣き顔になり、「私、邪魔かな？」と問い掛けてきた。必死で否定し、事なきを得て、以後こうして来てくれている。

嬉しいが、ちょっと困る。朝、部屋に入られるのはちょっと……。はい、そうです。……寝癖ですね。今違うことを考えた人は……ふふふ。いえ、何でもありませんよ。

まあ、そんなことは置いといて。

僕の両親はいない。と言っても、ご臨終なされた訳ではない。日本にはいないということだ。父さん達はジャーナリストで、世界各国、情報を求め飛び回っている。

そんな訳で、彼女は家族ぐるみで僕に親身になってくれている。いやぁ、いい幼馴染みを持ったもんだ。料理、家事を完璧にこなし、おまけに可愛くて、スタイル抜群。

月乃って、正に理想の女性じゃないか！！

「こ、光ちゃん！？　な、何言っ……ぅぅ……」

あっ、舌噛んだ。痛そうである。人事っぽい言い方だが仕方ない。人事なのだ。……って、あれ？　声に出してた？

「光ちゃんが変なこと言うから、噛んじゃったよ～」

うーん、声に出してたか……。セルフコントロールが出来てない。滝に打たれて心を引き締めようかな？

あっ、やっぱり止めます。そんなこと考えていると、ある人が来て……。うぅっ、考えるだけで身の毛がよだつ。

「ねえ光ちゃん、いきなりどうしたの？　私のこと、理想の女性だって？」

返答に困ったので、目線を泳がせていると、時計の針が六時五十五分を指している。

「月乃、占い始まるよ。チャンネル変えなきゃ」

棒読み、かつ上擦った声だったので、彼女は首を傾げる。でもやっぱり、占い好きな女の子。占いに興味を奪われ、僕の言葉は気にならなくなったみたいだ。

因みに、僕は四月二日生まれの牡羊座、月乃は七月十七日生まれの蟹座。

『はい、本日もやって参りました！　お天気お姉さんのドキドキ今日の占いだよぉ！！』

最近のお天気お姉さんは、天候だけでなく、運勢までも読むみたいです。いやはや、驚きですね。

『第一位は蟹座の貴方です！　今日は恋愛運がとても高く、思いを寄せている人とより親密な関係になれるかも。ラッキーワードは“光”。この言葉がつく人、物、動物と行動を共にすると、更なる幸運が転がり墜ちてくるでしょう』

幸運って、痛い思いをして転がって、墜落して、人を幸せにしているのですね……。何となく切ないね。

月乃と幸運の切なさとありがたさを語り合おうと彼女に目を移すと、顔を赤く染め、体をくねらせている。

顔赤い……風邪？　だったら不味い。熱を計らなくては。

彼女にちょっとごめん、と断ってから、額を合わせて熱を計測。うん、そんなに熱くない。よって風邪なし、異常なし。したがって患者は健康であります。

誤解なさらぬよう言っておくが、この行動は月乃と触れ合いたいという邪な気持ちから生じた物ではない。最強の敵であり、最凶の師である我が祖父の教えである『熱を計る時は“額合わせ計測”』を忠実に守っただけなのだ。

自己満足気味の演説を終え、達成感に浸っていると、月乃が更に赤くなっている。……何故？

「月乃、大丈夫？　辛いんだったら今日休んだほうがいいけど、どう？」

「うん、大丈夫、だよ……」

歯切れの悪い返事に一抹の不安を抱いてしまう。月乃は弱さをあまり外に出さない。だからこそ心配だ。

「大丈夫だったらいいけど、辛くなったら言うんだよ。月乃に何かあったら僕も悲しいもの」

言い終わると、彼女ははにかんだ表情で、ありがとう。僕に言ってきた。

――どくん

動悸がする。何だろう、この気持ちは？　言葉で言い表せぬ感情が、僕を支配していた。

「……ちゃん、光ちゃん？」

彼女に呼ばれ、我に帰った。あの動悸も、もう、ない。おかしいと思いつつも、思考をやめた。

『十一位は獅子座の貴方。今日はすれ違いで――』

十一位……て事は、見損ねた。僕は運勢と縁違いなのでしょうか？

一人しょげて、ソファで体育座り。そのまま指で“の”を書いていた。

すると月乃が近付いて来て、「私の運、分けてあげるから」と慰めてくれた。

月乃、ありがとう。涙がこぼれそうになった。だけど感謝の時は涙じゃなく、笑顔を返すべきだ。なので涙を堪えて、彼女に笑顔を見せようとした。

――驚愕に染まった表情になってしまった。

『残念ながら、最下位は牡羊座の貴方。今日は今月、いや今年、い

や今世紀最低の運気です。何をしても上手くいかず、失敗ばかり。今日一日は慎重な行動を心掛けて。ラッキーワードは……ないみたいなので、アンラッキーワードを教えちゃうよ。アンラッキーワードは“月”。これさえ気を付ければ、何とかいく……かも』

お天気お姉さんの言葉が僕の中で繰り返される。今世紀最低の運気って……厳しいですね。

がっくり肩を落とすと、月乃が僕に声を掛けてきて。

「光ちゃん、所詮は占いだからね。そんなに落ち込んだら駄目だよ」

「そうだね。所詮は占い、だよね」

無理矢理納得して、自分を保つ。ついでに深呼吸もしてみた。スゥーハァー。よし、何とか立ち直れそう。

「そろそろ学校、行こうよ」

月乃の提案を首肯し、皿を流し場に浸して準備ＯＫ。いざ学校へ、と歩き出そうとした所で、お天気お姉さんが言葉を発した。

『最後に今日のワーストワンの組合せの発表だよ。本日は牡羊座の男性と蟹――プツン』

「さっ、光ちゃん、行こっか？」

「……うん」

僕にはただ頷いて彼女の後を追うことしか出来なかった。

第2話　初日の風当たり

「ねえ、遥(はるか)さんって今どこいるの？」

玄関を出て、歩き始めた時、月乃が問い掛けて。遥とは僕の母親のことである。

「前は南アジア、その前はヨーロッパにいたらしいから、そのうち日本に帰ってくるのかもね」

推測の範囲を超えないけど、と付け足し、欠伸をする。うん、まだ完全には起きてない。

軽く体をほぐしていると、月乃が呟く。

「光ちゃんは寂しくないの？　私だったら、寂しいな。ねえ、光ちゃんは平気なの？」

彼女の目の真剣さに息を呑む。こんな顔されたら、理由を述べない訳にはいかない。頬を掻いて、照れ隠しをしながら彼女に告げた。

「月乃、僕は寂しさは感じてないよ。そりぁまあ、父さん達がいないのは寂しいかもしれないけど、それ以上に楽しいから。ある人が支えてくれているから。だから大丈夫」

やはり恥ずかしく、月乃に向かってでなく、電柱に向かってになってしまったけど、言いたいことは伝わったと思う。

反応を確かめるべく、彼女の様子をうかがう。彼女はふるふると

震え、下を向いている。

もしかすると、引いちゃった？

どうしようかと考えていると、月乃が僕の名を呟き、近付いて来て――ひしっ。

ひしっ？　……えっ！？　月乃が僕に抱き着いてる！？

ど、どうしよう？　ここで振り払うなんて問題外だし、かと言ってこのままでもいけない。第一、僕が保たない。ああ……通り過ぎて行く人の視線が痛い。

月乃の力が弛む気配はなく、狼狽えた僕がただ立ち尽くすのみ。

そんな時であった。

「あらあら、朝っぱらからお暑いこと」

ニヤニヤとあざけるように笑う、彼女達がやって来たのは。

「朱音（あかね）さん、仕方ないのですよ。あの二人は残された時間を必死に生きているのですから」

「えっ、そうだったんだ……。ごめんね、月乃、光君」

根も葉もなく、何が言いたいのかもさっぱり判らないことを、悪気もなさそうに嘲笑を交えながら、彼女達は話す。

「ちょっと、朱音も紫苑(しおん)も変なこと言うの止めてよ！」

月乃は彼女達を止め、近付くと、楽しげに談笑を始めた。

……遅刻しちゃうよ。

僕の嘆きも何のその、彼女達は時間を忘れ笑っている。

駄目だこりゃ。

声を掛けるのを諦め、空を見上げる。空は青く澄み渡り、雲が風に流されていた。

本当に今日の運勢は今世紀最低なのかと疑ってしまう。それほどまでに穏やかな空だった。

「光ちゃん、早く行かないと遅刻しちゃうよ」

いやいや、誰のせいだよ。

十分ほど歩き、学校に到着。昇降口に行って、まずは組分けを確認する。

とは言っても、僕達四人は全員、理系生物だから同じクラスになると思われる。

「あっ、皆同じクラスだよ！！　私達は二年二組だって」

ほら、言った通り。

「やったね、光ちゃん。また同じクラスだよ」

朝日が月乃の髪を照らし、黒髪が輝く。その輝きに劣らぬ、彼女の笑顔。それをみた瞬間、僕の心臓が暴れ出す。爆発の如く脈打ち、体内を駆け回る。

まただ……。この感覚、いったい何なのだろう？

答えは出ない。彼女に返事を返して、共に教室へと向かった。

入るや否や、教室がざわつく。それもそのはず、月乃、朱音ちゃん、紫苑さんの美少女三人が教室内に入って来たのだ。煩くならない訳がない。

そして気付く。男子の彼女達に向いた興奮気味の視線が、数秒後には、僕に対する殺意の籠った視線に変化することに！

うわぁ……そんなに見つめないでよ。照れる。……いや、ごめん。冗談。冗談だから、拳を握り締めて振り上げるの止めて！

通じたのか、拳を降ろし、各々席に向かって行った。

ふぅー。危ない、危ない。胸を撫で下ろし、見渡すと、窓際の後ろに四つの空きが目に止まる。

月乃達に呼び掛けて、僕と月乃、朱音ちゃんと紫苑さんが隣りの形で腰を降ろした。

「今年も楽しい一年になるといいね」

だね、と返し、それから会話に花を咲かせていた。

しかし、周りはそんな僕達を（というか僕を）良く思わなかったようだ。こんな声が聞こえて来た。

「くそぉ、瀬川の野郎……月乃ちゃんと楽しそうに話しやがって」
「瀬川ナンテ死ンデシマエ」
「瀬川ナンテ死ネバイイ」
「瀬川……コロス」
「きゃあ、光君だぁ！　今日も、可愛い♪　本当に食べちゃいたい」

因みに、“瀬川”ってのは僕の名字。月乃は“春日（かすが）”、朱音ちゃんは“九条”で、紫苑さんは“橘”。

というか恐っ。特に最後の人、何をする気なんですか？　あっ、止めて。聞きたくない。

穴が開くほど見つめてくるその女の子から目線を逸（そら）し、助けを求めていると、担任でも入って来たのか、教室が静かになった。

「はい、皆座った、座った。出席取るよ」

助かったと頭を持ち上げる。そこにいるは、昨年も担任だった数学担当の平塚　千智（ちさと）先生。ああ、千智先生が女神に見え……ないで

すね。

「光君、何か言ったかな？」

こ、この人、心を読んだのか！？

「そうよ。知ってる？　独身術って言うのよ」

千智先生。独身術というのは初耳であります。正しくは読心術かと。

「そ、そんなことはないわ。独身術がないなんて、有り得ない。もしそうだとしたら、私が独身なのは何でなのよ！」

いやいや、そんなこと僕に聞かれても困ります。それと千智先生、周りの皆、キョトンとしてますよ。先生が一人で喋っているように見えますからね。

「うっ……。まあいいわ。早速だけど、委員長を決めるよ。やりたい、又はやってもいいという人は手を上げて」

ふぅ、疲れた。これからは、千智先生の近くにいる時は注意しよう。

今の注意を心に刻み、周りを窺う。立候補者は……ゼロ。まあ自分から委員長になろうとする人は少ないから、当たり前っちゃ当たり前。

見兼ねた千智先生が、「いないようなら、推薦でもいいから、早く決めちゃうわよ」と促す。

教師として、それで間違ってないのですか？

その時、一人の男子生徒が勢い良く立ち上がり、「瀬川君がいいと思います！」と僕を推薦。

千智先生は、「じゃあ光君でいっか」と僕を委員長に決定。

うん。本人の意志は無視だよね。知ってる？　日本国憲法には基本的人権の尊重という、基本原理があるんだよ。ねえ、聞いてる？

おーい。無視か。無視なのか？

「ほ、ほら光君、こっちに来て他の役割決める」

僕に目線を合わせずにそう言う千智先生に呆れ、ため息を吐いてから教壇に向かう。仕方ないから副委員長から決めることにした。

「じゃあ副委員長になってもいいという人、手を上げて下さい」

暫く待つも、挙手する者は現れず、時間だけが刻一刻と過ぎて行く。

半ば諦め、推薦に変えようとした所で、月乃の手が上がった。

「光ちゃん、私、やるよ」

「本当？　月乃ちゃんが副委員長だったらサボれ……助かるわ。皆もいいよね？」

先生……間違ってますって。サボれるとか言っちゃ駄目でしょ。

僕はつっこんだが、皆はどうでもいいようで、拍手を送っている。このクラス、冷め気味だね。だけど、嫌いじゃないよ、そう言うの。

月乃が副委員長になってくれて、内心ほっとした自分がいたことは、彼女には秘密。

その後も滞りなく役割は決まっていき、朱音ちゃんは体育委員、紫苑さんは書記のポジションに着いた。言わば適材適所というやつである。

「よしっ、全部決まったね。光君、月乃ちゃん、ご苦労さん」

先生から労(ねぎら)いの言葉を言われ、席に着く。明日の日程や持ち物などの連絡を聞き、始業式の為に体育館に向かった。

頭の薄くなった教頭が壇上に上がって開会の言葉を発し、そして降りて行く。

うむ。暇だ。することもないし、聞くこともない。

春の心地よさに負け寝てしまおうか？　いや待て。今は立っている。寝たら倒れるよ、うん。

起きてつまらない話を聞くか、寝て転ぶかを天秤にかけ、どちらがいいか考える。結果、睡眠を選択し眠りについた。

僕はある発見をした。立ったまま寝ると、足の力が抜けて、空から墜ちるような感覚を味わえる。興味があったら試してみるといい。

「いやあびっくりしたよ。いきなりカクンと倒れそうになるんだもの」

「光ちゃん……それ自業自得ってやつだよね」

ふふっ、それを言われちゃ何も言い返せないよ。

第3話　暴風域に突入

あれから教室に戻り、千智先生のありがたいお話を聞いて、今日はお終い。これから入学式があるためだ。

部活に入っていない僕と月乃は勿論、朱音ちゃんと紫苑さんも部活禁止なので四人で帰る。

例の如く、女の子三人で会話が弾み、僕は一人寂しく空を見上げる。

うん。本当に綺麗な空だ。この下で昼寝したら、気持ちいいだろうなあ。考えたら眠くなってきた。帰ったらちょっと横になろうかな？

「光ちゃん、何してるの？　置いてっちゃうよ！」

えっ？　……うわ、月乃も朱音ちゃんも紫苑さんもかなり小さい。いつの間にこんな距離が……。

「ごめん、今行く」

少し大袈裟に返事をし、追いかける。彼女達が止まっていてくれたお陰で程なくして追い付いた。

「もう、しっかりしてよ！　端から見たらおかしな人、良くて変な空好きの人だよ」

……以後気を付けます。

「いいや、違うね。あの目は恋する乙女の目だったね。さあ光君、愛しの男性(ひと)は誰なんだね？」

うん、違う。第一、僕は乙女でもなければ女性でもない。

「いやいや、朱音さんも間違っていますよ。光さんはあの空の向こうに何があるのかを、真剣に考えていたのですよ」

「「えっ？」」

月乃と朱音ちゃんの声が重なり、お互いの顔を見合わせた後、

「光ちゃん……私は光ちゃんがどんなに病んでても、ずっと側にいるからね」

「光君、大丈夫だよ。まだまだこの世界も捨てたもんじゃないよ。ね？　だから早まっちゃ駄目だよ」

変な方向に行ってしまいました……。

そんなことはない。そう否定すると、月乃は安堵の表情を、朱音ちゃんと紫苑さんは不満気な表情を見せた。月乃、心配してくれてありがとう。朱音ちゃん、紫苑さん……ふざけるの、やめれ。

ため息を吐くも、吐息は見えず、春を実感する。

またこんな騒がしい一年が始まるのか――そう思うと頬が弛む。

楽しくなりそうだ。小さく呟き、また空を見上げる。澄み渡る青

と、所々浮かぶ白。

こんな空が一番好き。何となくだけど、穏やかな気持ちになれるんだ。

大きく深呼吸をし、せっかちな彼女達の後に続いた。

「そうだ！　せっかくだから皆で“あそこ”行こうよ」

帰り道の途中、“あそこ”へと続く坂の下で、月乃が提案する。

僕は断る理由もないので賛成。朱音ちゃんと紫苑さんは用事があるようで、ごめんと謝り帰って行った。

気を取り直し、坂を登る。結構傾斜があるのでなかなかしんどい。だけど登って行く。それほどの価値がこの上、“あそこ”にはあるのだ。

「ねえ、今日って本当に今世紀最低の運勢なの？　そんなに酷いことなかったよね？」

「いや、結構あったよ。勘違いから始まり、委員長にされ、立ち寝中に転びそうになったし。……まあ、最後のは自業自得だけどね」

「ははっ……そっか。ま、まあ凄く不味いことはなかったんだから、良かったんじゃないかな？　ほ、ほら、早く行こ」

手を引っ張られ、急かされるように坂道を登る。ふと後ろを振り向くと、町並みがとても小さかった。

坂道を登りきり、“あそこ”に到着する。

目の前には満開の桜。風になびき、花びらが散っていく。それらは空高く舞い上がった後、地に落ちる。

「綺麗、だね」

「うん、綺麗」

もっと他の言葉で表現したかったが、言葉が見つからない。そんな形容しきれぬ美しさがここ一帯に溢れていた。

ここは“花見公園”。名の如く、桜の名所として名高い。幸い、平日の午前であったため、花見客はほとんど見られない。

「ねえ光ちゃん、あの人達って……」

目前の光景に目を奪われていた時、後ろから声が掛かった。何々？　と振り向くと、ここにいるはずのない人物が、そこにいた。

見間違いかな？　と思っていたら、その人達がこっちに手を降ってきた。

間違いない。――父さんと母さんだ。小走りで駆け寄った。

「よう光、月乃ちゃん。元気にしてたか？」

まあね、と答える。いつ帰って来たの？　と質問しようとしたが、遮られてしまった。

「光、重要な話がある。実は父さん達、今年一年間アメリカで仕事があるんだ」

ん？　そんなに重要？　いつもと大して変わらない気が……。

首を傾げていると、父さんはまた口を開いた。

「でな、その時のビジネスパートナーが、月乃ちゃんの両親のあいつらなんだよ」

ふーん……ビジネスパートナーが月乃の両親ね……。って、月乃もアメリカ行くの！？

驚きのあまり、声を失っていた。すると月乃が慌てた様子で口を開いた。

「ちょっ、晃司（こうじ）さん。それって本当ですか！？」

ああと返答し、苦虫を噛んだような顔をする父さん。横で笑っていた母さんが喋り出す。

「月乃ちゃん、貴方はこの一年、良かったら光と暮らしてもらうわ」

僕と暮らす？　どういうこと？

月乃共々、疑問符を浮かべていると、父さんさんが笑いながらこう告げた。

「いやぁ、怜（さとる）の野郎がな、『大事な娘を一人、日本に残してアメリカなんて行けるか！！』って叫んでよ。そしたら紗織（さおり）が『それなら光君と一緒だったら安心ね』ってほざいてよ……」

「それからは言わずもがなね。怜さんが頼むわ土下座するわ、大変だったのよ」

聞いた月乃は、顔を引きつらせていた。月乃の父親である怜さんが土下座して頼み込み、その横で月乃の母親である紗織さんが笑っている。そんな情景が浮かんだのであろう。

「それで、僕と月乃が一緒に住むって決まった、と」

笑顔でコクンと頷く二人。

「なんで勝手に決めてんのさ！！　第一、月乃に聞いた？　聞いてないよね？」

声を荒げ、問詰める。

「落ち着け。まあ、月乃ちゃんに聞かなかったのは悪かったが、大丈夫だろ。ほれ」

諭され、指差す方向に目を向ける。その先には月乃。彼女は、「光ちゃんと一緒に暮らす……それも一年……」と呟きながら頬を押さえ、体をくねらせていた。

あれって大丈夫なの？　到底大丈夫そうには見えないよ。

「もう、もう少し自分に素直になさい。本当は月乃ちゃんと一緒に暮らしたいのでしょ？」

そんなことない……とは言えなかった。心の中では、月乃と暮らしたいのかもしれない。

「結局は、月乃ちゃん次第だな」

父さんに言われ、聞いてみる。

「ねえ月乃。僕は問題ないけど、月乃はどう？」

「わ、私も大丈夫、だよ」

青臭い会話だったと思う。ぎこちなくて、歯痒くて。

父さん達は、そんな僕達を温かい目で見守っていた。

「決まったなら善は急げだ！　ほら早く帰って支度するぞ」

「そうよ。月乃ちゃんも家帰ったら、準備するの忘れないようにね」

善なのか大いに疑問だが、まあいい。月乃と顔を見合わせ、笑い合った後、父さん達に続いた。

第3話　暴風域に突入（後書き）

やっと書き終わりました。会話を考えるのに時間がかかって、こんな遅さに…。本当に自分の無力さに嫌気を覚えます…。

兎に角、後二回ほどで一段落です。まずはそれまで頑張りたいと思います。

蛇足ですが、次話とその次はそれぞれ光視線と月乃視線になりそうです。

感想・評価宜しくお願いします。

第４話　ひと時の団欒　～光～

月乃を自宅まで送り、我が家の扉を開く。お酒の匂いが漂ってきて、顔をしかめた。

リビングに入るとお酒の匂いは強まり、そして空き缶やおつまみが辺り一面に散乱している。

父さんに「おっ、光おかえり！」と言われたが、この状況を作り出したのは恐らく彼なので、無視することに。

落ち込む父さんを一瞥し、何故こうなったのかを母さんに尋ねる。思った通り、父さんが散らかしたと聞かされ、頭が痛くなった。

「早く着替えてらっしゃい。片付けだってしなくてはならないのですよ」

母さんに従い、自室に向かう。その間父さんがこちらを窺っていたが、また無視した。

着替えを済せ、リビングに戻る。途端、部屋の隅でいじける父さんが、視界に入る。

聞くと、母さんに構ってもらえず嘆いているとのこと。あんたは一体何歳だ？

母さんは先ほどと異なり料理をしていた。手伝おうか、と声を掛

けたが、座ってなさいと断られる。

仕方ないので、ソファに腰掛ける。父さんが近付いて来たが、顔を背けた。

泣き出しそうな父さんを見兼ねてか、母さんが発言した。

「晃司さん……今すぐ片付けないと昼食抜きにしますよ」

見兼ねてなどいなかった。苛立っていたのだ。

父さんは背筋を伸ばして直立したかと思ったら、物凄い速さで片付け始めた。それは明らかに人間の速さを凌駕していた。

三分後、母さんが昼食のチャーハンを運んできたのと同時に、部屋の掃除が完了した。

父さんは化け物である、と脳に刻む。正しい認識だと思う。

声を揃えて「いただきます」。母さんの微笑んでの「召上がれ」で食事が始まる。

この食事前の挨拶。小さい頃からずっとこの形だった。今まで続いていることに、多少の照れと嬉しさを覚える。

「なあ光、月乃ちゃんとはどこまで行ったんだ？」

「えっ？　花見公園だけど？」

「いやいや、どんな関係になったのかって聞いたの」

ああ、そうか。行くって、そっちの行くか。納得、納得……？

なんで月乃と？　僕達はなんでもない、ただの幼馴染みだ。それに僕が月乃となんて、役不足も甚だしい。

「何言ってんのさ。僕が月乃とじゃ釣り合わないよ」

「光こそ、何を言っているの？　そんなこと月乃ちゃんがいつ言った？　貴方がそんなこと言ったら月乃ちゃんは悲しみますね」

母さんの言葉に絶句した。確かにその通りだ。母さんに言ってもらって助かった。月乃の、彼女の悲しむ顔は見たくない。

「そうだね……。そんなこと言っちゃいけないね。僕が間違ってた」

そう告げると、母さんは破顔し手招き。

寄るとソファを叩き、座れと言っている。腰を降ろし、何用で？と首を傾げる。

「光、良く言いましたね。偉い子ですよ、貴方は」

と言って、頭をよしよし撫でられた。避けようとするも、頭をホールドされ、逃げ出せない。

……恥ずかしい……。高校二年にもなって、いい子いい子と撫でられるとは思わなかった。

そんな中、父さんがいいなあ、と呟いていた。あんたは本当に何

歳だ？

なんでこの人が父親なのか疑問に思う。故に聞いてみた。

返ってきたのは、「分からない」という曖昧な返事。そして、「昔は格好良かったのですがね……」遠い目でそうとも言われた。

段々、父さんが可哀相に思えてきた。父の背中が小さく見え、ため息がこぼれた。

「あっ、そうだ。食材もう殆どないから、後で買っておくのよ。月乃ちゃんと一緒に行くのがいいわね」

はぁいと返事し思う。なんで呼び掛け？　それになんで月乃と？

疑問は重なる。いつ出て行くのかも聞いてない。適当過ぎる。

また聞いてみると、「今日出発するし、今日月乃ちゃん来るからだぞ。ったく、光、言っただろ」怒られた。

初耳だし、驚きだし、終いには責任転換ときたものだ。呆れる。

はぁ……。思わずため息をこぼす。帰国してその日に出国。おかしい以外になんと表現すればいいのだ。

ああ……頭痛くなった。そして眠い。

月乃がもう少しで来るらしいけど、来たら起こしてくれるよね？

母さんを信用し、瞼をそっと閉じた。

頭を撫でられているような感触と、後頭部に感じる柔らかさに違和感を覚え、目を覚ます。

月乃の顔が視界一杯に広がっていた。

第４話　ひと時の団欒　～月乃～

「送ってくれてありがと。じゃあね光ちゃん」

彼が見えなくなるまで手を振り続けて、敷地を跨ぐ。

「「おかえり」」

声の揃った出迎えの言葉である。夫婦というものは波長まで似てくるのだろうか？　私もいつかは光ちゃんと……。

私の行動を不審がって、お母さんが首を傾げる。正気に戻り、慌ててただいまと言って部屋に上がって行った。

「お昼までまだ掛かるから、荷物まとめておくのよ」

はーいと答え疑問を覚える。なんで今まとめるの？　お母さん達いるんだから、まだいいんじゃないのかな？

疑問は聞いてみるのが一番の解決策。なんで？　と尋ねた。

「あれ？　今日アメリカに発つって言ってなかった？」

言ってないよ、お父さん。ああ、この二人の共通点は唐突なその行動性にあるね。

顔が軽く引きつったのを感じたが、いつものことだと諦め、自室に向かった。

押入れの奥から旅行用のボストンバッグを引っ張り出し、荷物を詰め込む。服は春物だけにして、夏になったら取りに来ようと思う。

元々そんなに服を持っているほうではないため、大して重くはならなかった。自分で持って行けそうなので一安心。

そうそう、これを忘れていた。持って行かなきゃ。

最近のマイブームをそっと荷物の上に重ねて、チャックを閉めて出来上がり。我ながらいい働きぶりだ。

動いたらお腹が空いてきた。その時、お母さんから料理が出来たと呼び掛けられる。ナイスタイミング。軽い足取りでリビングに向かった。

リビングの扉を開けると、いい香りが鼻腔をくすぐる。食卓には二人分のスパゲティが乗っている。

何故二人前？　と思い、周りを見回す。お父さんの口の周りにミートソースの付着を発見した。

貴方には、家族揃って食事するという観点がないのですね。残念です。

悲しく思ったが、いつものこと。満足気にお腹を叩くお父さんに一瞥くれて、スパゲティをパクついた。

美味しい！　顔が綻ぶ。お母さんはそんな私の顔を見てニコニコ

している。

お母さんは以前レストランのシェフとして働いていたため、料理の腕前はピカ一。私が料理を好きになったのには、少なからずお母さんが影響している。

十五分ほどでスパゲティを平らげ、食休み。ふぅー……良きかな良きかな。

椅子の上で満腹感を味わっていると、お父さんが口火を切った。

「月乃、いつになったら光君に告白するんだ？」

なぜ貴方にそんなこと聞かれなきゃいけないの？　それに答え義務はある？

それでもデリカシー皆無のお父さんは続ける。

「光君は優しいし、顔も結構いいし、それに好青年だから、ほっとくと誰かに取られちゃうぞ」

……分かってるよ、そんなこと。だけど、だけど光ちゃんは私のこと、ただの幼馴染みとしか思ってないよ……。告白したところで断られるのは目に見えている。だったらこのままの、丁度いい関係でいたいと思うのは、おかしいのかな……。

私は何も言えずに下を向いていた。

「あんたね、私の娘が近くにいて、光君が違う子に興味を持つと思

う訳？　月乃も、そんな顔しないの。もっと自分に自信を持ちなさい。ね？」

ギュッと抱き閉めてくれることが嬉しくて、頬を涙が伝った。お母さんの娘に生まれて良かった、そう心から思うよ……。

お父さんもお父さんで、私の涙に動揺したのか、「あっ、あの、そのな、父さんが悪かったよ……」と謝ってくれた。

「本当にあんたは、女の子の何たるやを知らないんだから」

「いや、あの……すみませんでした」

お母さん達の会話に笑みがこぼれる。そんな私を見てお母さん達は、ほっと胸を撫で下ろした。

心配掛けてごめんなさい。そしてありがとう、お母さん、お父さん。

「でもねえ、私としてはいい加減焦れったいのよね。月乃、この一年で光君を落しちゃいなさいよ」

あれ？　味方だったお母さんがいきなり敵に？

お母さんの口からは、光ちゃんをものにするテクニックだとか、様々なことが紡がれていく。それを全てこなせと？　無茶言っちゃいけない。

お父さんが苦笑いしながらお母さんを止め、光ちゃん家に出発。

徒歩一分、光ちゃん家に到着である。

インターホンを鳴らすと遥さんが出迎えてくれた。

「随分と遅かったのですね。もう少ししたら迎えに行こうかと思ったぐらいですよ」

お父さんの所為にして、玄関をくぐる。お父さんは晃司さんに捕まり、叫び声をあげた。私達は聞かない振りして中へと向かった。

リビングに入る。ソファにもたれるように座り、寝息を立てる光ちゃんを見た。

近付いて観察する。口を微かに開き呼吸をし、その度に胸が膨らみ縮む。表情は穏やかで、いい夢を見ているようだ。

可愛い。それしか言えなかった。そのままじっと彼を眺めていると、背後で笑い声が聞こえる。

はっとし、振り向いて弁解するも、逆に光ちゃんを見つめていたと白状してしまった。

「ふふふっ。それでは光を宜しくお願いしますね」

えっ、もう行くの？　光ちゃんを起こそうとしたが、お母さんに防がれた。

「まあまあ、起こさない。こんなに気持ち良さそうに寝ているのに、起こすのは可哀相よ。それに、膝枕する絶好の機会じゃない」

お母さんはからかいなのか本気なのか分からないが、そう言った後、遥さんと家を出て行った。

膝枕か……悪くないかも。

早速実行するために光ちゃんの横に座り、彼の体を倒して、太股に頭を乗せる。

ふお！？　重みが何とも言えない。ああ、頭を撫でたくなるのは母性本能？

優しく頭を撫でる。ううん、と反応する光ちゃんが可愛い。

にしても、本当に光ちゃんは可愛い顔をしている。睫毛も長いし、鼻立ちも綺麗。

気付いたら彼に顔を近付けていた。

はっと思ったが、もう遅い。彼の目は開かれてしまっていた。

第5話　騒々しい一日

「……月乃？おはよう？」

「えっ、あっ、うん。おはよう」

かなり不自然な会話だったけど、気にする事なかれ。

とりあえず、状況確認を。

目の前にあるのは月乃の顔。

目が大きく、鼻はスラッと調っている。

頬はうっすらと紅潮しており、唇は小さく、ふっくらとしていて、

キスしたいという衝動に駆られ…じゃなくて、何考えてるんだ僕…。

兎に角、目の前に月乃の顔があるのはいいとして、後頭部に伝わるこの柔らかい感触は？

待てよ…。

この位置から考えると、此処は月乃の太股！？

はっ、として慌てて立ち上がろうとするも、月乃に抑えつけられた。

「月乃？どうした？」

「ん？あっ、ごめん」

何度か呼び掛けると月乃は離してくれた。

一体何だったのだろう？

そうは思ったものの、とりあえず起き上がる。
すると、父さん達がいない事に気付く。
首をかしげてうーん…、と唸っていると
「お父さん達はもう出てったよ」
と言われ、やっと理解する。
「そっか…行ったのか。眠んなきゃ良かったな…」
ため息混じりにそうぼやくと、
「宜しくって言われたし、大丈夫だよ♪」
と月乃。
「だとしても、普通起こさない？」
そう言うと月乃はビクっと反応したが、
「あっ、そうだ！遥さんに買い物行ったほうが良いって言われたんだった」
と話題を変え、台所へ。
不思議に思ったけど、大した事じゃないだろうし、気にするのは止めよう。
そう頷いていると、「光ちゃん。食材もうほとんどなかったよ」と月乃。
「じゃあ買い物行こうか？」
僕の提案に頷いてついでに他のも買おう、と言い、置いていた

ポーチを拾うと、早く行こうよぉ～、と言わんばかりに腕を引っ張ってきた。

月乃に急かされて立ち上がると、窓の鍵とガスの元栓をしめる。

「よし、行こっ」

月乃は笑みを浮かべた後、僕の手を握ってきた。

何故手を？

というかやばいんですけど。

心臓がばくばくいってるし。

そう思って月乃を見てみると、顔が真っ赤で。

恥かしいんだったらやんなきゃいいのに、と思ったが、そんな事を言うほど僕は意地悪ではない。

その内慣れるだろうしね。

という事で何も言わずに家を出る事に。

手を繋ぐ事に慣れてきたので、

「何処行く？」

と問うと、

「じゃあ、最近出来たデパート行こうよ♪」と言われたので、そこに決定。

電車に乗って2駅、そこからおよそ3分歩くと目的地に。

大した距離でなかったものの、かなりの疲労感が…。
ん？何故かって？
そんな事は言わずもがな。
月乃と歩いているからに決まっているでしょうが。
それに手を繋ぐというオプション付き。
ああ…。周りの目線が痛い…。
目線は凶器になるんですね…。
そんな視線に冷や汗をかいていると
「まずは生活用品から買おっ♪」
と笑顔で言われた。
周りから殺気が上がったが、気にせずに従う事にしよう。
エスカレーターに乗り、３階の雑貨売り場に。
そこで歯ブラシやマグカップ、タオル等をお揃いで買っていく事にした。
別にお揃いじゃなくて良かったけど、そこは月乃のこだわりらしい。
必要な物を買うと、本来の目的である食材を買う為、１階に降りる。
因みに今日はカレーを作ってくれるらしい。

もちろん、僕も手伝いますよ？

野菜を適当に選んでいると、月乃に
「もう光ちゃん！ちゃんと選ばないとダメなんだから！」
だって…。

仕方ないので、野菜は月乃に選んでもらい、ルーを探す。

3分ほどで見つけ、戻って来ると、月乃は野菜を選び終わっていた。

……うん。いいお嫁さんになれるね。

「そんなぁ♪」
月乃は体をくねらせて嬉しそうに微笑んでいる。

何故分かった！？
もしかして心を読んだのか！？

そんな阿呆な事を思っていると、
「声に出してたけど？」
とキョトンとした様子で言われてしまった。
……気を付けよう。
そう心に深く刻んだ。

食材も選び終わった事なので、レジに。

程なくして買い物カゴをレジに置くと、レジのおばちゃんに
「あらあら、若夫婦？いいわねぇ」
とからかわれてしまった。

すると何を思ったのか月乃は
「えへっ♪やったね、光ちゃん。若夫婦だって♪」
と。

……月乃。
キャラ変わって来てないかな？

まあ月乃がその気だったらこっちだって。
「僕達夫婦に見えてるんだね。じゃあいっそこのまま結婚しちゃう？」

これでかなりのダメージが期待できる。
というか僕のほうがキャラ変わって来たかも…

兎に角、月乃の様子を見てみよう。

きっと面白い反応をしてくれているはず！

期待して月乃を見てみると、顔を真っ赤にして、
「光ちゃんがしたいんだったら……してもいいよ…」
とぶっ飛んだ発言を。
僕は慌てながらも
「月乃、冗談だからね？」
と月乃に言う。

もちろん、顔は真っ赤だけど…。

すると月乃は一瞬目が曇った後、すぐに笑顔になり、
「そんな事分かってるよ♪」

と言った。

……ちょっと強がっている様に見えるのは気のせいかな？

まあすぐにレジのおばちゃんに

「夫婦じゃないです」と言っていたから大丈夫だよね？

そんなこんなで買い物を終え、デパートを出る。

ふと月乃を見ると、じっと自分の手を見た後、胸に押し当てていた。

この時ばっかりは、いくら鈍い僕にでも月乃が考えている事が分かった。

でも何でだろう？

たかがレジからの数分、手を離していただけなのに。

そもそも僕と手を繋ぐ事に意味があるのだろうか？

頭の中を疑問が飛び交ったが、振り払い、月乃の側に近付き、

「月乃、帰ろう」

そう言うと右手を月乃のほうへ伸ばす。

月乃は顔を驚かせたが、満面の笑顔で大きく頷いた後、しっかり僕の手を握ってきた。

手を繋いだまま家の近くまで来ると、夕日が綺麗に沈んでいる所で。

「夕焼けって何であんなに綺麗なのかな？」

月乃は夕日を見ながら質問して来たが、僕は全然聞いてなんかいなかった。

否、聞こえてなかったのだ。

月乃の顔を夕日が照し、いつもとは違う雰囲気を醸し出している。

僕はそんな月乃に目を奪われていたからだ。

「光ちゃん、聞いてる？」

「あっ、ごめん。聞いてなかった…」

「人の話は聞かなきゃダメなんだよ！」

月乃にそう言われ、再度謝ると許してくれた。

そんなに大切な事じゃなかったらしい。

そんな会話をしていると我が家に到着。

いや我等が家の間違いだね。

「ただいま」

そう言うと月乃が

「おかえり」

と言ってくれた。

月乃だってただいまじゃないの？と聞いてみると、

「だって帰って来たのに、返事が無かったら悲しいよ」

と言って来た。
確かに一理ある。
という事で、月乃のただいまにおかえりと返してから家に入った。
月乃はリビングに着くや否や、買って来た食材を持ち台所へ。
さっそく月乃が料理を始めたので、手伝おうと思い立ち上がると、
「私一人で大丈夫♪それに光ちゃんはたくさん持ってくれたから疲れてるでしょ？」
と言われてしまった。
だけど、月乃1人にやらせる訳にはいかない。
「こういうのって、2人で作ったほうが美味しくなると思うんだ」
そう言うと、月乃は納得してくれた様で野菜切りを頼んできた。
全部切り終わると、月乃はその野菜やお肉を軽く炒め、鍋で煮込み始めていた。
しばらくすると、カレーが煮込み終わり、ご飯をよそい、カレーをかけ完成。
実に美味しそうな匂いが漂ってきて、お腹が鳴ってしまった…。
月乃に
「光ちゃんの食いしん坊♪」
と笑われたが、仕方ない気がする。

僕の一番の好物はカレー。それも月乃が作ってくれたのなのだから。

…本人には恥かしくて言えないけどね。

それから30分ほどでカレーを完食。

やっぱり、月乃のカレーは格別だ。

何か隠し味でも入れてるのかな？

そう思いつつも、茶碗洗いを。

これは今日の料理のお礼と言って1人でしている。

茶碗洗いも終わり、月乃と一緒にテレビをダラダラと見ていると「ねぇ光ちゃん。私ってこれから何処で寝ればいいの？」と聞かれた。

……まったく考えてなかったので、準備などしている訳がない。

仕方ないので、僕の部屋を使ってもらう事に決めた。

僕はソファでも寝れるし、それに女の子をソファに寝させるほど非情じゃないし。

そう告げると、本当にいいの？と聞いて来たが、大丈夫だよと言い、お風呂を勧めた。

月乃は浴槽に行った様だ。

にしても、今日は色々あった。
委員長から始まり、月乃との半同棲。
あながち占いも外れてない気がする。
するとだんだん眠気が…。
ちょっと疲れたし、少し目を閉じた。

気付くとシャワーの音が止んでいた。
眠ってしまっていたみたいだ。
かなり眠いし、今日は寝よう。
そう思い、2階の自分の部屋に。

電気がついていたけど、気にしない、気にしない。

部屋の前まで来て扉を開けると、そこには半裸の月乃。

あっ、月乃って着痩せするタイプだ。
いつもより、胸が大きく……じゃない！

おどおどと月乃を見ると体を震わせながら、
「きゃぁー！！光ちゃんのえっち！！」
と言われ、枕を思いっ切り投げられた。

急いで部屋を出ると、ついさっき自分が言った事を思い出して来た。

……最悪…。

本当に今までで1番悪い運勢かも…。

そう嘆きつつ、ソファで眠りについた。

第5話　騒々しい一日（後書き）

微妙に間が空いてしまった、碧井　嘉貴です。

今回はいかがだったでしょうか？

自分的にはダラダラと書いてしまった感が否めません。

というか、徐々に光達のキャラがおかしくなって来てます。

本当に安定しない、文才の無い自分で申し訳無いです…。

これからもこんな微妙な間隔で書いていこうと思っています。

感想・評価、宜しくお願いします。

第6話　和解と憎しみ

……光ちゃんがそんな人だとは思わなかったよ…。

……私、もう光ちゃんと一緒にはいられない…。

……ばいばい、光ちゃん……。

月乃？

一緒にいられないってどういう事？

出て行くって事？

「月乃！！」

「ひゃあ！！」

いきなりの大声に驚いたようで月乃は変な声をあげた。

月乃はそこにいた。

あれは夢だったらしい。

「どうしたの光ちゃん？」

月乃が問い掛けて来たので、何でもないよ、と誤魔化した。

月乃は首をかしげつつも、台所に戻って行く。

はぁ…。
夢で良かった…。
そう思い、月乃に目を移す。
月乃はいつもの様にくまのプリントがしてあるエプロンを着て、楽しそうに料理をしている。
本当に料理中の月乃は輝いている。
そう思っていると、昨日の事が脳裏に浮かび、体温が上がってきた。
しかし、あんな事をしてしまったのだ。
謝る必要がある。
本人は気にしていないと言った素振りを見せているが、そんな訳はないだろうし。
という事で、台所の月乃の元へ。
月乃は僕に気付いた様で、どうしたの？と聞いて来た。
「あのさ、昨日の事なんだけど……本当にごめん」
そう言うと月乃は下を向いて黙ってしまった。
「言い訳するの女々しいって思うかもしれないけど、寝ぼけてて さ、月乃が僕の部屋を使ってるの忘れてて…」
月乃は変わらず、黙っている。

許してもらえないかもしれない。
そう思って、再度口を開きかけたその時
「わざとじゃないんだよね？」
と聞かれた。

僕がもちろんだよ、と言うと、
「だったら許してあげてもいいよ」
と月乃。

「えっ、許してくれるの？」

「うん…。だけど、条件があるんだ…」

条件とやらが気になったが、月乃に許してもらう為だったら仕方ない。

「分かった。で、条件って？」

そう聞くと、月乃は嬉しそうに
「今度の週末、デートしよっ♪」
と言って来た。

それ、僕にとってマイナス？

そんな疑問を覚えたが、許してもらえるというんだから、文句は言うまい。

「分かった。じゃあどっか行こうね」

「うん♪」

凄く嬉しそうに笑った月乃。
それを見ていると心がどくんと高鳴った。

なんだろう、この感じは？
今までこんなのを感じたのは初めてだった。
生まれて初めての感覚に戸惑っていると、昨日お風呂に入ってなかった事を思い出す。
今からお湯を沸かしても間に合いそうにもなかったので、月乃に告げた後、シャワーを浴びに行く。

シャワーを終えて、髪の毛を乾かしつつリビングに戻ると月乃の料理が食卓に並んでいた。

「光ちゃん。早く食べようよ♪」

そう言われ、席に着き、朝食を食べ始める。

今日はトーストとハムエッグ、サラダにコーヒーという、洋風な料理。

月乃は和洋中のどの料理も美味しく作れる。

月乃の旦那さんになる人が羨ましいって思うね。

「もう、光ちゃんたら♪そんな事ないよ♪」

……前にも同じ様な事あったよな…。
気を付けなきゃ。

顔を両手で覆いながら悶えている月乃を横目に、食後のコーヒーを啜る。

因みに、僕のはブラックで、月乃のはミルクとシュガー入り。
月乃は苦いのが少し苦手。

月乃も落ち着き、家を出ようとしたが、
「光ちゃん、占い始まっちゃうよ」
と言われ、立ち止まる。

昨日が散々な結果だったから、今日は上位が期待できるだろう。

そう思い、テレビを着ける。

「今日もやって来ました！お天気お姉さんのドキドキ星座占いだよぉ♪」

さて、何位だろうか？

「今日の1位の星座は、昨日に引き続き蟹座の貴方！今日は恋愛運が凄い！！何か約束をすると、効果アップが期待できるよぉ！」

また月乃が1位だ。
2日連続1位はなかなか珍しいな。

月乃は
「やっぱり、今日もついてた♪」
と呟いている。
その後2位、3位…と続き、11位。
「11位は魚座の貴方！今日は……」
うぅー。
こっちも2日連続ですか…。
ガクッと頭を垂れていると、月乃が黙って服を握ってきた。
気遣ってくれる月乃に感謝しながら、占いの結果を待つ。
第一、昨日あんなんだったのだから、今日はあんまり酷くはない筈。
「残念ながら、今日の最下位は牡羊座の貴方。昨日に続き2日目…。ドンマイとしか言い様がないよぉ！今日言う事ははっきり言ってないです！強いて言うと職場や学校には要注意！人間関係にトラブルが発生するかも」
うん、気を付けよう。
とは言っても、最下位にしてはそんなに酷くはなかった。
やっぱり昨日が最悪だったからか…。
そんな事を思いつつ、テレビを消して家を出る。

話しながら、学校に着くと、嫌な視線を四方八方から感じる。

いったい何？

疑問に感じるも、気にせず教室へ。

扉を開け、黒板が目に入った。

月乃も気付いたらしく、目を丸くしている。

でも何で？

何でこれが書いてある？

黒板には

『祝！！光＆月乃、同棲スタート！』

と様々な色チョークを駆使し、大きくそう書いてあった……。

第6話　和解と憎しみ（後書き）

今日は書くつもりでなかったのですが、何となく書いていました。

それはともかく、やっと二日目です。

連載が終わるまで何話書けばいいか予想出来ません…。

それでは、感想・評価、お願いします。

第7話　狂った学校、光速の騎士

何でこれが？
この事は僕達しか知らない筈なのに……。

月乃も同じ気持ちらしく、僕のほうに目を向けて来る。

二人して固まっていると、千智先生が教室に入って来た。

千智先生は僕達の元に近寄ると、
「光君、月乃ちゃん、あれは本当？」
と聞いて来た。

何て答えればいいんだろう？
同棲っちゃ同棲だし、違うっちゃ違うからなあ……。

言いあぐねていると、
「千智先生、私達は同棲何てしてないです！」
と月乃が言う。

千智先生はおかしい……という顔をしながら、
「昨日手を繋いで買い物に行って、そのまま家から出て来なかった、
という情報を耳にしたけど……。本当に同棲してないのね？」
と言って来た。

えっ……。
何で知ってるの？
そもそも、誰か見てたの？

僕達の少なからずの動揺を見て、肯定と取ったのであろう。
千智先生は
「やっぱり同棲してたのね」
と言うと、何処かに電話をし始める。
周りの目線が気になるが、気合いで無視して月乃に話し掛ける事に。
「月乃、皆に知られちゃったね…」
「うん…。だけどいつかはばれてただろうし、その時が今だっただけだよ」
月乃の前向きな発言で、少し気が楽になった。
すると電話を終えた千智先生は
「光君も月乃ちゃんも大胆なのね♪流石は遥ちゃんと沙織ちゃん達の子供だわあ♪」
と。
因みに、父さん達と怜さん達と千智先生は学生の頃仲が良かったらしい。
僕と月乃は同時にため息を吐くと、席に着こうとした。
その時である。放送が聞こえた。
ピンポンパンポン
「今日は朝から放送何てしてすまないのぉ。ところがじゃ、そ

れをせざるをおえない状態に陥らせた不届き者が居る。恐らく知っていると思うが、二年二組の瀬川　光じゃ。奴はこの渚高アイドルの月乃ちゃんをあろう事か家に連れ込んだのじゃ」

おいおい…。
かなり出鱈目だよ。
というか、校長がそんな事言う？

そんな校長に対する疑問を浮かべていると、放送の続きが流れた。

「そこでじゃ。今日の授業は止めとする。と言っても、特別な内容に変わっただけじゃから心配はいらんぞ。その内容じゃが、簡単に言えば瀬川　光を儂の所に連れて来るだけじゃ」

……あぁ、僕を校長室に連れて行くのか。
そりゃ簡単だ。

……ん？
誰を連れて行くって？
あれ……僕？

僕の心境を知ってか否か、放送は続く。

「そして見事、瀬川　光を連れて来れたなら、あの有名大学、桜花（おうか）大学の学校長推薦を与えようぞ」

何！？
あの全国トップ１０に入るかと言うほど人気大学、桜花大学の学校長推薦！？
欲しいと思う人が多い筈…。

「我が学校からの推薦枠は2人。丁度いいから2人1組になり、奴を捕まえるのじゃ」

ははは っ。

本格的に僕を捕獲するつもりか……。

ん？

そういえば、僕は捕まえられるだけ？

「ふっ、心配するでないぞ、瀬川　光。おぬしが無傷で儂の元に来れたらおぬしを推薦してやろう。もちろん、パートナーも一緒にじゃ。どうじゃ、悪くは無かろう」

この爺さん、人の、それも離れているのの心を読むとは、かなり出来る…。

にしても、まったくもって悪くない。

というか、逆にかなりいい。

でもパートナーねぇ……。

皆、目が血走ってるし、変なのと組むとこっちが逆にヤバそうだな……。

一応、これの原因は僕と月乃が一緒に暮らしてる事だし…。

眉間に皺を作りながら、うーんと唸っていると、月乃が話し掛けて来た。

「ねぇ光ちゃん、一緒に組む？」

「止めたほうがいいよ。僕と組むと皆が凄い勢いで襲いかかってきそうだし……」

僕は大丈夫だけど、月乃が怪我をするのは嫌だし、沙織さんに合わせる顔がない……。

しかし月乃は引き下がらず、

「光ちゃんとだったら大丈夫だよ！第一、光ちゃんって小さい頃からおじいさんから体術習ってたんだから、そう簡単に殺られないよ♪」

と軽々しく言う。

月乃、字が間違ってない？

それともそれで合ってるの？

僕、今日殺されかけるの？

月乃の言葉に冷や汗が流れたが、先程の説明をしようと思う。

僕の祖父、瀬川　皓一（こういち）は世界各国を武者修行で訪れ、その先々で道場破りをしていたらしい。

その課程で独自の体術を開拓、昇華させたそうで。

そして帰国後、格闘技界に殴り込み、当時はかなり恐れられていた。

そうして格闘技界における地位を獲得後、妻ができ、子が生まれ、孫が生まれた時、

「この子に我が全ての体術の極意を教える！」

と言い張り、５歳から爺ちゃんが行き先不明の旅に出るまでの１０年間、徹底的に体術を教わった。

まったく、酷いもんだよ。
素手で熊を倒せとか、素手で猪を倒せとか、終いには自分を倒してその屍を越えて行けとか、色んな修行という名の拷問を受け続けたし……。

まあそんなこんなで、そんじょそこらの人間には負けない。
無論、人間じゃなくても負ける気はしない。
だからと言って、月乃をわざわざ危険に晒す必要はない。

だけど、月乃は絶対僕と組む、と言い張っている。

悩んだが、月乃の目に涙が浮かんで来たので結局僕からパートナーになって、と頼む羽目になった。

僕っていつも月乃の涙に弱い…。

「たぶんパートナーも決まった事じゃろうし、そろそろ開始じゃ。準備は出来たかの？」

準備か…。
よしっ、今から月乃と道順の確認「スタートじゃ！！」
うおぃ！！
準備時間短くない？

と言っても、そんなの不必要だけどね。

「じゃあやりますか！」

「ラジャーだよ、光ちゃん♪」

そう言い合い、教室を出ようとした刹那、クラスの大半が
「「瀬川をコロセ！！」」
と言いながら飛び掛かって来た。

月乃を守る為、背後にまわらせ、男子生徒約１５人と対峙する。
最初の奴のパンチを躱し、カウンター。
続いて二人が両側から同時に襲いかかって来たが、頭と頭を叩き合わせる。
次は飛び蹴り。
面倒だったので、蹴って来た瞬間、脚を掴むと他の集団に投げつけてやった。

その攻撃が意外や意外、効果覿面（こうかてきめん）で殆ど動かなくなった。

彼等が起き上がらないとも限らないので、ひとまず月乃の手を掴み、廊下へ。

月乃が何も言わないのに気になり、見ると、小刻みに震えていた。

「月乃、大丈夫？恐かった？」

そう聞くも返事はない。

こんな時は爺ちゃんどうしろって言ってたっけな？

うーん……。
あっ！そうだ！
そんな時は「抱き締めて、愛の告白を！」だった！

そうか、そうすればいいのか……って違う！！

1人、漫才をしていても、月乃の震えは止まる気配がない。

こうなったら、爺ちゃんの知恵を使おう。前半だけどね。

そう決心し、月乃に近付く。

「月乃……恐かったよね……ごめん」

そう言い、軽く抱き締める。

月乃は一瞬ビクッとするが、次第に落ち着き、強く抱き返してきた。

嗚呼、月乃の胸が……じゃない！

月乃のいい匂いが……じゃない！！

一度心を落ち着かせ、月乃の頭を撫でてやる。

すると月乃の震えが徐々に止んできた。

ふぅー、一件落着かな？

安堵の色を浮かべていると、今の様子が恥かしくなった。

急いで月乃から離れようとするも、月乃が力一杯くっついてくる。

「月乃、と、とりあえず離してくれない？」

声が裏返ってしまったが、言うと月乃はゆっくり離れた。

「大丈夫？」

もう一度尋ねるととても弱々しく

「うん……」

と頷く。

月乃……恐かったよね……。

ごめん……。

心の中で謝り、もう月乃を怖がらせないようにするには、どうすればいいか考える。

頭をフル回転させ、考えに考えた結果、月乃を抱えて校長室にダッシュが一番ではないか、と。

抱え方は恥かしいけど、俗に言う『お姫様抱っこ』がベストだろう。

脚の稼動範囲が広いし。

そうと決まれば善は急げ（？）だ。

月乃に一言

「ちょっとごめんね」

と告げ、抱き上げる。

月乃は

「えっ！？こ、光ちゃん！？ち、ちょ、ちょっとな、何を！？」

と凄く吃(ども)りながら言ってくるが、ここは心を鬼にしなければ。

その状態で走り始まると、月乃は僕の心境を理解したのか、何も言わずにギュッと首にしがみついてくる。

月乃が頼ってきてくれる、という感覚が嬉しくて、校長室までスピードを落とさず走った。

もちろん、途中でかなりの数の人間を蹴散らしましたよ。月乃に気付かれないように相当な速さでだけどね。

校長室に着いたので月乃を降ろし、ノックなしで突入。

「光ちゃん、ノックしなきゃダメだよ！」

そんな声が聞こえたがスルー。

というか、聞こえてなかったと言ったほうが正しい。今は校長を一発殴る事しか頭にないのだ。

校長に飛び掛かろうとした所、

「随分と早いのぉ。開始３０分ほどで此処まで来るとは、流石は皓一の孫であり、唯一の弟子の光君じゃな」

と言われたので、一時停止。

話を聞いてみる事に。

「何故爺ちゃんの名前を？もしかして知り合いでしたか？」

「知り合いというか、無二の親友じゃ」

えっ、この人爺ちゃんの親友…。

それにしても、僕の周りの大人ってどこらしかおかしい。

これは法則なのかな？
うなだれ、ため息を吐くと、
「まあ、儂等の事はいいじゃろ。話は変わるが推薦じゃな。一応聞くが、おぬし等二人は桜花大学への進学で良かったかのぉ？」
と聞かれたので、ええと言うと月乃もはいと答える。

「じゃあ、来年度の推薦はおぬし等じゃ！」

校長は意気揚々と言い、良かったのと肩を叩いて来た。

その後、クラスに戻ると悲惨な情景だったが、千智先生がホームルームを始めていた。
僕も月乃と共に席に着き、千智先生の話を聞く。

明日の主な連絡をし、今日は早くも学校が終わった。

この日以降、僕は『光速の騎士』と呼ばれている。
全校生からの畏怖の対象になった事は言わずもがなであるが。

第7話　狂った学校、光速の騎士（後書き）

やっと書き終わったぁ！

はあはあ…。

冬期休暇の課題を片付けつつ、予習をするという日々…。

満足な物を書くのに時間がかかってしまいました。

以後は計画的にやって行きたいとつくづく思いました。

それでは、感想／評価、宜しくお願いします。

第8話　初めてのデートは遊園地で（前書き）

月乃視点です。

第8話　初めてのデートは遊園地で

あれからの3日間は特に何も無く、平穏な学校生活を送れました。

授業は始まったものの、まだ簡単なので少しの予習でも充分付いて行けます。

それに、分からない所があっても光ちゃんに聞けば一発解消です。

何かあったと強いて言うと、私の部屋が出来ました♪

と言っても、今まで使ってなかったらしく、凄い汚かったけどね。私1人でも出来たかもしれないけど、光ちゃんに手伝ってもらって綺麗にしました。

ベッド（遥さんの）を部屋に運び入れる時、光ちゃんと2人で運ぶのかな？って思ってたら、1人でいとも簡単に運んでました…。

重くないの？と聞いてみたら

「ベッド何て重いうちに入んないよ。あんなの修行に使った岩と比べたら軽い軽い」

と遠い目をしながら答えられました…。

光ちゃん…、苦労したんだね…。

そう言えば最近光ちゃんは『光速の騎士』というあだ名で呼ばれる様になりました。

何でも、私を抱え上げて走っている時に周りの人達をなぎ払っていたそうです。

私は気付きませんでしたが。

何でそんな事したの？って問詰めてみると、
「一々止まって倒していたらまた月乃が恐がっちゃうかなって思ったからさ…」
とおどおどしながら言って来ました。

光ちゃんが私の為に…。
そう考えると胸が一杯になります。

それにしても何で“騎士”なのだろう？

それが今期最大の謎です。

紫苑や朱音に聞いても教えてくれないし…。

話は変わりますが、今日は待ちに待った光ちゃんとのデート初日です♪

何故初日かと言うと、あの後光ちゃんが
「恐い思いさせちゃったお詫びに何かさせてよ」
と言って来たので、土日のどっちもデートする事にしちゃいました♪

現在時刻、９時３０分。
予定では１０時に出発の予定だけど、全然準備が…。

第一、着て行く服が決まらないし…。

光ちゃんは可愛い系が好きなのか、格好いい系が好きなのか、
良く分かりません。

その後も鏡の前で悩みに悩んで、二つに絞り込んでいると
「月乃、準備出来た？」
と光ちゃん。

時計を見ると、もう１０時、５分前でした。

これは非常にマズいですね…。

焦りが最高潮に達すると、妙案が浮かびました。
光ちゃんに選んでもらえばいいのです！

「光ちゃん、中入って来て」

光ちゃんは顔に疑問の色を浮かべながら、部屋に入って来ます。
光ちゃんにさっきの二つの服を見せ、
「光ちゃんはどっちが好き？」
と聞きました。

光ちゃんは少し悩んだ後、可愛い感じのほうを選びました。

光ちゃんは可愛い系が好きっと、私の脳内光ちゃんメモに書くと、ありがとうと笑顔で言いました。

光ちゃんはどう致しましてと、微笑み返してくれます。

にしても、光ちゃんの微笑みは凄く可愛いです。
あの可愛らしさは反則もんです。

そう言えば前、紫苑と朱音が

「今年の文化祭は光さん（君）を女装させます（させるよ）！」
と言ってました。

……楽しみにしとこう。

光ちゃんが女装した姿を想像して、心の中で笑い、着替えようと服に手を。

すると光ちゃんが
「えっ！？月乃！？まだ僕いるよ！」
と言ってくれましたが、気付いたのは、上半身が下着一枚になった後でした…。

「えっ……っ、き、きゃぁー！！」

私が叫び声をあげるよりも先に光ちゃんは外に。

……うぅ…。
二度目だよぉ…。
それも今回は確実に私が悪いし…。

そう嘆きながら、急いで服を着替えます。
1分ほどで着替え終え、いつものポーチを持って部屋の外に。

光ちゃんは廊下で顔を真っ赤にしながら
「落ち着け、落ち着くんだ！」
と叫んでいます。

光ちゃんに近付くと、
「本当にごめんなさい！」

と謝りました。
光ちゃんは全然大丈夫だよと全然大丈夫じゃ無さそうに言って来ました。

ごめんね、光ちゃん…。

申し訳なくて、下を向いて黙っていると、光ちゃんは
「月乃これからデ、デートなんだからさ、暗くなるのは止めよう。それに、明るくない月乃は月乃じゃないよ」
と言ってくれました。
私は光ちゃんの心遣いが嬉しくて
「うん、そうだね、光ちゃん…」
と言って抱き付いちゃいました。

光ちゃんは私の気持ちを理解した様で、ギュッと抱き返してくれます。

最近抱き付いてばっかりだなぁ。
光ちゃん、引いてないよね？
抱き返してくれるから大丈夫だよね？

光ちゃんに抱き付いたまま、そう考え、光ちゃんから離れると、手をとって
「早く行こ♪」
と催促します。

光ちゃんは頷くと、施錠とガスの元栓を閉めに。

光ちゃんの作業（？）が終わったのを確認し、さっそく駅へ。

今日は遊園地に行くつもりです。

というか、私が無理を言って決めちゃいました。

やっぱり初デートは遊園地でしょ。

駅に着き、3分ぐらい待つと電車がホームに。

私達はシートに腰掛け、何気ない会話を始めました。

因みに、遊園地の最寄りの駅はここから4つ行った所です。

徐々に席も埋まり、遊園地まであと1駅という所で、電車に老夫婦が入って来ました。

光ちゃんはそれを見て、私と目線を合わせた後

「席どうぞ」

と言い、老夫婦を座らせました。

「いやあ、ありがとう。最近足腰がどうも弱くて、座れたらいいのぉと婆さんに言っておったんじゃよ」

「ええ、本当にありがとう。今の若い人は平気で優先席に座っている人だって多いのに、あなた方は違うのですね」

老夫婦にそう言われると、光ちゃんは当然の事をしたまでですから、と謙遜していたがやはり嬉しいようで。

もちろんだけど、私も嬉しかった。
やっぱり光ちゃんって格好いいと思う。
凄く気さくで、紳士だし。
ちょっと鈍感なのがたまに傷だけどね。

目的の駅に着くと、老夫婦に別れを告げ、遊園地へ。

あぁ、遊園地楽しみだなぁ。
最近行ってなかったし。
それに“あれ”があるし…。

そう思い、ふふっと笑ったいると、光ちゃんが
「月乃、最初何処行く？」
と聞いて来ました。

うーん…。
最初ねぇ…。
“あれ”から行っちゃおうかな？
よし、“あれ”からにしよう！

そう決心し、光ちゃんに
「じゃあお化け屋敷から行こう♪」
と言いました。

すると光ちゃんの顔がみるみる青ざめていきます。

「月乃、僕がお化け苦手なの知ってるじゃん！なのにどうして？」

光ちゃんは即座にそう言うも、いいからいいからと言いつつ、
光ちゃんを引っ張ってお化け屋敷へ。

現在、お化け屋敷の中です。

そして光ちゃんが私の腕を強く握り締めています。

…涙目で。

兎に角可愛いです。

チワワを連想させられる様な可愛らしさを、私に見せています。

それに時々

「ねぇ月乃…恐いよ…」

と泣きそうな声で言って来ます。

あぁ…なんでだろう？

抱き締めたいって思っちゃう。

これが母性本能というやつなのでしょうか？

でも、お化け役の人が出て来るたび、その人達が意識を失っていきます…。

もちろん、光ちゃんの拳で…。

お化け屋敷を出ると、光ちゃんはぐったりとしていました。

ははははっ、ちょっとやり過ぎたかな？

と言っても私は何もしてないけどね。

光ちゃんがそんなんなのでベンチに座って一休みする事に。

近くのベンチを見つけ、光ちゃんを半ば引きずる様にして連れて行きました。

しばらくすると、ちょっとは元気になって来た光ちゃんですが、まだ何処かに行くのは辛そうで。

何か飲んだら良くなると思い、飲み物を買いに行く事にしました。

光ちゃんに何か飲みたいのある？と聞くとコーヒー…と弱々しく言って来ました。

これ以上、光ちゃんの具合が悪くなると嫌なので、少し小走りで自販機の元へ。

光ちゃんのコーヒーと私のミルクティーを買い、行こうとすると、

「ねぇ君、暇？暇だったら一緒に周らない？」

と如何にもナンパ男と言った男が3人、目の前に立っていました。

「私連れがいるので…」

そう言い逃げようとしましたが、一人に肩を捕まれました。

手を払って駆け出しましたが相手は男。

直ぐに捕まってしまいます。

「何なんですか？痛いですし、やめて下さい！」

そう怒鳴ったもの、効果はない様で、何処かに連れていかれそう…。

引きずられる方向を見ると、建物の裏に向かっているみたい…。

嫌だよ…。

恐いよ…。

光ちゃん…助けに来てよ…。

体が勝手に震え、涙が流れて来ました。

その時、

「月乃！月乃！！」

と後ろから聞こえ、振り返ると、会いたかった、助けに来て欲しかった光ちゃんがそこにいました…。

第8話　初めてのデートは遊園地で（後書き）

いやあ、前言撤回ですね。

何が学業に集中するだ！

また小説書いてるじゃないか！

という声が頭の中に響きますが、スルーしときます。

今回も微妙な手応えしか感じられず、目隠し状態ですが、出来るだけいい物を書きたいと思っております故、応援宜しくお願いします。

第9話　夕暮れに少年は何を想う

……遅い…。
あまりにも遅すぎる。
飲み物を買いに行くだけでこんなにかかるのだろうか？

少し様子を見に行こうかと、腰を浮かべようとした時、月乃が行った方向から女の子の怒鳴り声が。

嫌な胸騒ぎがする…。

いてもたってもいられず、ちょっと駆け足気味で声がした方に向かってみる。

しばらく走ると、男3人が女の子を何処かに連れて行っている。
良く見ると、その女の子は月乃で。

「月乃！月乃！！」
気付いたらそう叫んび、全力疾走をしていた。

僕が近付いても男達は月乃の手を離さず、お前誰？という顔でこっちを向く。

月乃はほっとした表情を僅かながら見せるが、目には涙が溜まっていて。

こいつ等が月乃を泣かせた…。
こいつ等が月乃に酷い事をした…。

理性が崩壊しそうなのを必死で堪えつつ、
「その手、離してあげてもらえません？」
と丁寧な口調で言うが、男達は聞く耳を持たない様で。

返事がないという事は、離す気がないという事。
だったら無理矢理引き離すしかない。

そう思い月乃を掴んでる男に近付くと、手を打ち払って月乃を救出し、背中に庇う。

怒りを顕にした男が殴ってくるが、躱すと月乃に当たってしまうので仕方なく腕でガード。
一瞬出来た隙をつき、顎に拳を入れ意識を刈る。

綺麗に入ったらしく、白目になりながら男は崩れていった。

他の男二人も頭に血を昇らせた様で殴り掛かってくるが、直線的な動きな為、見切りやすい。
パンチを受け止め、そのまま腕を掴んで関節をきめる。

「どうします？このまま骨折っちゃいましょうか？それとも今直ぐに目の前から消えてくれますか？」

少しずつ力を加えつつドスのきいた声で言うと、男二人は呻きながら今すぐいなくなります！と連呼していた。

もう大丈夫であろう。
腕を離してやると、のびている男を抱え、脱兎の如く逃げて言った。
男達を一瞥し月乃を見ると、気が弛み体から力が抜けていって倒れかけた。
「光ちゃん…恐かったよ…。助けに来てくれないかもって…」
月乃を抱いて支えてやるとそう言い、震える手を背中に回してきた。
最近、月乃を泣かせてばっかりだ…。
僕が頼りないばっかりに…。
僕が自己嫌悪に陥っていると、月乃の手が頬に触れた。
「光ちゃん…そんな哀しそうな顔しないで…。私は大丈夫だよ。だって光ちゃんが助けてくれたから…」
月乃の言葉が頭に響き渡る。
辛い筈なのに、僕を元気づけようとして…。
君は弱さを隠しすぎだよ…。
たまには感情を爆発させてもいいんじゃないかな?
「月乃…辛かったら、泣いてもいいんだよ。僕は此所にいるから…受け止めるから…」
そう言うと月乃はビクッとした後、徐々に震えが大きくなり、感情を塞止めていたダムが決壊した様に泣き崩れてしまった。

そのまま抱き締めながら大丈夫だよ、と呼び掛けていると5分ほどで落ち着いてきた。

良かった…。
これで安心だ。

安堵の色を浮かべていると、興奮していた頭が冴えてきた。

周りを窺うと、物凄く視線が僕達に向いていて。
中には殺意が込められているものも…。

ああ、この光景は確かに目立つ。

とりあえず、場所を移動せねば。

そう思い月乃に移動しようと話し掛けると、彼女も今の状態に気付き、俯きながら頷いた。

僕達は人目を避ける様に、足早でその場を去った。
もちろん、手は繋いで。

しばらくすると、丁度いいベンチがあったので、ちょっと立ち止まる事に。

月乃が買ってくれたコーヒーを啜っていると月乃が
「ねぇ光ちゃん…さっき怪我しなかった？」
と心配してきた。

「大丈夫。あれぐらいじゃ僕は怪我しないよ。というか出来ないが正しい…」

ちょっとおふざけを交えて言うと月乃はくすくすと笑った。

月乃はすっかり元気ってやつかな？

あの表情からは無理してる感じは読み取れないから大丈夫だよね？

月乃を見てみると、ミルクティーを美味しそうこくこくと喉を鳴らしながら飲んでいた。

あれだったら大丈夫だ。

そう思いつつ、コーヒーを飲み干す。

僕は急がなくていいと言ったのにも関わらず、月乃は慌てて飲み終えてしまった。

けほっ、けほっ。

ほら言わんこっちゃない。

一気飲みなんてするからそうなるんだ。

呆れながら、月乃の背中を軽く叩いてやると、咳が止まった。

月乃の顔がみるみる赤くなったのは言うまでもない。

その後、調子を取り戻した月乃に振り回され、ジェットコースター等の絶叫マシン中心に乗った。

僕は絶叫マシンが苦手な訳ではないが、あんなに乗るとちょっと…。
月乃はずっときゃあきゃあ騒いでいて、ちょっと凄いと思ってしまった。

楽しい時間とは早く過ぎてしまう物で。
気が付くと、辺りは夕焼けに染まっていた。
そろそろ帰ろうかな。
そう思っていたら、
「最後は観覧車乗ろっ♪」
と月乃に言われた為、観覧車へと向かった。

観覧車に近付くにつれ、人が少なくなる。
あれ？
普通、観覧車って人気あると思うんだけど、それは僕だけ？
まあ、並ばずに乗れるからいいっちゃいいけど…。

観覧車に着くと、周りに人は係員の2人しかいない。
観覧車に乗ってる人もいない。

おかしいと思いつつも、月乃に引っ張られ、係員の元へ。

「すみません、観覧車乗りたいんですけど」

月乃がそう言うと、係員は顔を見合わせた後、明後日のほうを見ながらドアを開けて僕達を乗せてくれた。

あの係員怪しい…。
何かあるのか？

そんな疑惑の眼差しを係員に向けていると、月乃が
「あのさ、光ちゃん…今日はありがとう♪」
とはにかみながら言ってきた。

「感謝される様な事はしてないよ。僕だってかなり楽しんだし」

僕の言葉に顔を弛ませ、月乃は今日一番の笑顔を僕に見せてくれた。

どくん

心臓が高鳴る。

どくんどくん

前の様な激しい動悸。

もしかすると、これって…

ガタン

…何か変な音が上のほうから聞こえてきた。

ガタン
メシメシ
ググッ
バキッ
ん？

バキッ？

月乃に笑いかけて見ると、苦笑いを返してくれた。

下のほうから、人々の叫び声が聞こえる。

次第に観覧車が傾いてきた気がする。
いいや、気がするのじゃない。
実際に傾いている。

現在地、上空１５ｍほど。
落ちたらまず助からないだろう。

月乃が僕の手を強く握ってくるが、握り返す余裕がない。

少しずつ高度は下がってきているが、地上まで保つのか？

角度が有り得なくなり、遂に観覧車に限界がきた様だ。

そう判断すると、ドアを開け、月乃に
「飛び降りるよ」
とだけ告げ、抱き締めながら翔んだ。

今までの楽しい想い出が甦ってくる。
これなんて言ったっけ？
走馬灯だっけか？
まあ、別にいいけど…。

そんな事を考えている内に、地上が近付いてきた。

あわよくば捻挫で済んでくれ。

そう神に祈ったものの、神は願いを聞いてはくれなかった様で。

月乃を抱き締めたまま着地すると、ボキッと嫌な音が脚から聞こえてきた…。

余談だが、あの後医者に全治3週間の骨折と宣告された。

因みに、遊園地は封鎖になったらしい…。

第9話　夕暮れに少年は何を想う（後書き）

今回、前半が物凄くシリアスです。
なので最後、無理矢理コメディーにする為観覧車破壊しちゃいました♪
てへ♪

すいません。
調子乗りました…。

次回からは普通に学園生活に戻ります。
面白いものを書ける様に頑張りたいと思います。

今後とも、宜しくお願いします。

第１０話　お姫様の乱心

「うぅ…光ちゃん、分かんないよぉ…」

「だからこれは内積からコサインを出して、そこからシータを出すってさっき教えたよね？」

「それが分かったら苦労はしてないよぉ！」

……現在、中間テストの勉強中であります。

月乃はテスト前になると僕を巻込み、勉強会を開催する。

「ねぇ光ちゃん、勉強教えて♪」

と言って。

少しでも嫌そうな顔を見せると、目をうるうるさせて僕を見上げて来るという、高等テクニックを発動させ、僕に有無を言わせてくれない。

ええ、拒否れませんとも。

僕は月乃の涙に弱いんです。

前にも言ったでしょ？

そんな訳で、今は数Ｂを教えている。

月乃はあんなに毛嫌いしてるけど、ベクトルは考え方次第で簡単にも困難にもなりうる。

月乃が言った通り、それが出来たら苦労はしないのだけど。

「はぁ…」

月乃が相当悩んでいる様なので、そろそろアドバイスをしてあげよう。

「月乃、ベクトルはね……」

数分後、僕の力説に納得した様で、月乃は次から次へと問題を解き始めた。

「あぁ、ベクトルって可愛いかも…」

…少し飛んでるが気にしない、気にしない。

その後も順調に他の教科の勉強をやっている様だ。
今回のテストは大丈夫みたいだな。

ほっとしたのも束の間、
「光ちゃん、ちょっと…」
と月乃の声。

はぁ…。
まだまだ先は長い様で…。

そういえば、僕の骨折は１０日で完治した。

医者曰く
「人間じゃない…」
だそうで…。

その後、月乃が
「だって光ちゃんは化物ですもん」
と笑顔で医者に言っていて、ヘコみましたよ…。

……月乃の事は信じてたのに…。

そんな回想をして胸を痛めていると、夕食時に。

月乃は頑張ってるし、僕が作るか。

そう思い台所に立つと
「光ちゃん、私が作るよ」
と慌てて言ってきたが、座らせる。

「月乃は勉強してて。それと今日からテスト終わるまでは僕が夕食作るから」

「えっ…。でもそれじゃ、光ちゃんが…」

月乃の気持ちは嬉しいが、ここは
「じゃあお願い」
と言う場面ではない。
というか、そんな酷い事僕には出来ない。

仕方ないので、強行手段を。

「そうか…月乃は僕“なんか”が作った料理“なんて”食べたくないよね…。僕“なんか”の料理“なんて”……」

相当“なんか”と“なんて”を強調する。

思った通り月乃は困った顔をして俯き、

「違うよ…。光ちゃんの料理が嫌な訳じゃなくて……」

と言い訳を並べ始めた。

勝利を確信した僕は

「じゃあ僕が作るけど、文句はないよね？」

と話し掛けると、月乃はコクリと頷いた。

ふっ、まだまだ甘いな、月乃は。

しばらく勝利の余韻に浸っていたが、夕食を作らねば。

冷蔵庫に挽き肉が入ってる筈だから、ハンバーグでも作るかな。

比較的簡単だし。

３０分ほどでハンバーグとその他数品を作り終わった。

出来は上々かと。

食卓に並べると月乃が物凄いスピードで飛んで来た。

…どんだけお腹空いてたの？

僕が席に着くと、月乃はこれ又物凄いスピードで食べ始めた。

ははは っ。
何だか月乃がおかしいや。
僕も食べ始めると、役7割がた食べ終えた月乃が目を輝かせて
「光ちゃん、はぐっ、凄く、もぐもぐ、美味しい、ごくん、よ♪」
と言ってきた。
月乃…口の中、丸見えだよ…。
月乃っておしとやかなイメージがあったけど、僕の思い違いだ
ったみたいだ…。
月乃への何かが壊れた音がするし…。
はぁ…。
僕のため息を聞き、月乃は不思議そうな表情を。
あぁ、月乃はやっぱり沙織さんの娘だね。
天然具合がそっくりだ…。
呆れながら月乃を窺うと、既に完食していた…。
それからテストが終わるまで、月乃は様々な表情を見せてくれ
た。
分かった事は一つ。
月乃は僕が作る料理がかなり気に入ったみたいです…。

そんな訳で、休日は料理を作るという事を義務付けられてしまった…。

第１０話　お姫様の乱心（後書き）

今回は、光と月乃の会話をリアルな物にする為、数学の用語を使ってしまいました。

不快感を抱く方もいらっしゃるかもしれませんが、お許し下さい。

第11話　テスト返しは嫌いです

「はぁ…。憂鬱だなぁ…」

窓際で一人黄昏ていると、紫苑と朱音が話し掛けて来ました。

「どうしたのですか、月乃さん？」

「月乃、何かあった？」

私の悩み、“テストの結果”はこの2人には縁のない話です。紫苑は何時も学年1位だし、朱音も毎回1桁にいるし…。

あぁ…私の周りの人って皆天才だよ…。

私が押し黙っていたのを不思議がっているのか、紫苑達が眉間に皺を寄せながら首をかしげています。そんなに真剣な顔をしているのだから付き合ってもらおうかな。

そう思って、相談に乗ってもらう事にしました。

「……つまり光さんに勉強を教えてもらったけれど、解けた手

応えがない、という事ですね」

「……うん」

光ちゃんの手を煩わせ、夕ご飯まで作ってもらったのに酷い点になりそうだから…。

……自分が情けなくて仕方がないよ…。

更に落ち込んでいると、そんな私を見兼ねたのか朱音が

「まだ返ってきてないんだからさ、元気出そうよ、ね？それに、光君は月乃を責めないよ」

と話し掛けてくれました。

朱音の温かい言葉に何かが込み上げてきます。

この感情を押さえていると、紫苑が

「ほら月乃さん、光さんが来てますよ。泣き顔を見せて心配させるのですか？」

と優しく宥めてくれました。

返事の代わりに頷き、涙を拭います。

紫苑と朱音はそんな私を見て微笑んでいました。

間も無くして、光ちゃんがやってきました。

彼は一瞬怪訝そうな顔をしましたが紫苑達を見てすぐに笑顔に。

光ちゃんって不思議な人です。
鈍感なのに人の感情を読み取るって、何かしら心配してくれます。
と言っても、恋愛の方面には疎いけどね。

光ちゃんの顔を見て安心してきました。
今までの悩みが何処かに吹き飛んでしまったみたいに。

紫苑達は私の表情から憂いが無くなったのを感じた様です。
私達に別れを告げると部活へ向かって行きました。

因みに、紫苑はテニス部で朱音はソフト部に所属しています。
２人共中学から続けていてかなりの腕前。

光ちゃんと家（と言っても光ちゃんの家だけどね）に帰り、食事やら入浴やらを済すとあっという間に１２時に。
テストの疲れが溜まっていたので、今日は早く寝る事にしました。
それに明日は全教科のテストが返ってくるし…。

ジリリリィ

目覚しの音で意識が覚醒してきます。

うぅ…眠い…。昨日やっぱり心配でなかなか寝付けなくて、あ

んまり寝てないんです。
だけど愚痴を言っていても何にもなりません。
朝食とお弁当を作る仕事が私を呼んでいます。
体に鞭を打って立ち上がり、着替えを済ませてリビングへ。

ん？何か聞こえる…。
不思議に思い、耳を澄してみるとトントンと小気味良い音が聞こえて来ます。

頭が回らず、状況を上手く理解出来ませんでしたがとりあえずリビングに入ってみました。
するとそこにはエプロンを着た光ちゃんが台所に立っていて、私に気付くと挨拶をしてきました。

私も挨拶をして、食卓に目を移すと焼き魚を主菜とした和食が並んでいて。

光ちゃんに聞いてみると
「今日は起きたの早すぎでさ、せっかくだからご飯でも作ろうかなって思ってね。あっ、あとお弁当ももう少しで出来るから座って待ってて」
とバレバレの嘘をついてきました。

光ちゃんの気遣いが嬉しくて、
「うん、ありがとう♪」
としか言えませんでした。

光ちゃんが作ってくれたご飯を食べ終わると、丁度いい時間帯に。
準備を済ませてリビングに戻って来ると、光ちゃんにお弁当を渡されました。

本人は美味しくないかもしれない、と言ってましたが、そんな事は気にもなりません。
光ちゃんが私の為に作ってくれただけで、もう胸が一杯なのだから。

光ちゃんに感謝の言葉を言って微笑むと、光ちゃんの顔がほんのり紅潮した気がします。
ちょっと気になりましたが、すぐに普通に戻ったので見間違いという事にして、学校へ行きました。

「じゃあテスト返すよぉ！阿部くーん、伊藤さーん……」

此所までは順調に平均プラス5点ぐらいをキープしていて、これが最後の教科。
だけどそれは私が1番苦手としている数Bで…。
光ちゃんに教えてもらった通りやったつもりだけど、何時もは4、50点代だからなぁ…。

ナーバスになって、物思いに耽っていると私の名前が呼ばれました。

「月乃ちゃん、今回は凄く頑張ったわね♪」

先生にそう言われ、首をかしげながらテストの解答用紙を受け取り席に直行。
もちろんまだ見てません。

席に座って一呼吸。
気持ちを落ち着かせて解答用紙を開きました。

すると９３点という文字が目に入って来て。
おもわず目を擦ってしまいました。

光ちゃんにそれを言うと、
「月乃、やったじゃないか！凄いよ、９３点何て！」
と褒めてくれて、照れ笑いをしてしまいました。

朱音の方を向くと、微笑んで
「やったね、月乃！月乃の努力が実ったんだね♪」
と言われました。

「だけど光さんにお礼を言うのを忘れてはいけませんよ」

声がした方を振り向くと、ちょっとやっちゃたと言いたげな表情を浮かべた紫苑がそう言っていました。

あっ、忘れてた！

そう思い、光ちゃんに目を向けると、解答用紙を受け取って帰ってくる所でした。

光ちゃんはご機嫌な様子で席に座ると、ずっと見ていた私に気付いて話し掛けてきました。

「ん、どうかした？もしかして、顔に何か付いてる？」

光ちゃんはそう言うと顔を触りだし、何か付いてるか確認し始めちゃいました。

面白かったけど、話を戻す事に。

「光ちゃん、違うよ。そんなんじゃなくてね、あの…勉強教えてくれてありがとう…」

私がそう言うと

「どういたしまして」

と優しく笑い掛けてくれました。

光ちゃんとのやり取りを終えると、全員に配り終わった様で、千智先生が話し始めていました。

「……だよ。此所から、重要な話をするよ」

危ない危ない。大事な事を聞き逃す所だったよ。

「今年から理事長が変わったって事は知ってるよね？それでその理事長がこの中間テストの結果に応じて文化祭の時に配給する金額を増やす、とおっしゃったの」

ふーん…そうなんだぁ。
金額アップかぁ……っ！？
本当に？

「本当よ、月乃ちゃん」

千智先生って心読めるの！？
うぅ…。
迂闊だったよぉ…。

「増額は学年別に1番のクラスから5千、3千、2千、なしだよ。で、我等が2組は……何と1番でした！」

それは当然の結果だと思います。
首位の紫苑を筆頭に光ちゃん、朱音ちゃんもいるし、極端に悪いって人もいないしね。

何はともあれ、プラス5千円。
これで“あの計画”も実行が見えてきて。

紫苑達に顔を向けると、やはりニヤリと笑っていました。

私達が口角を上げて文化祭に思いを寄せていると、
「因みに、来週の体育祭でも同じ様な事があるからね♪」
と千智先生。

クラスの皆が騒ぎ出したのは言うまでもありません。

第１１話　テスト返しは嫌いです（後書き）

どうもです、皆さん。気付けば今年ももう終わり。正に光陰矢の如しってやつですね。

話はずれますが、課題の進み度合があまり良い状態にありません。恐らく課題の消化が終わるまで投稿はしないと思います。と言うか、出来ないと言ったほうが正しいです…。

この小説を楽しみにしていらっしゃる方は多いとはとても言えませんが、しばしお待ち下さい。

第１２話　幼馴染みｖｓ従姉妹

「来週の体育祭の出場競技を決めましょう。じゃあ朱音ちゃん、よろしくね」

千智先生に促され、朱音ちゃんは教壇へ。

「まずは陸上競技の方から決めるね。えっと陸上には１００ｍリレーと借り物競走と……」

うちの体育祭を大まかに２つに分けると陸上と球技となる。それぞれクラス４０人の約半々が出場し、それらの総合結果で順位を付けるのだ。

「光ちゃんは何出るの？」

月乃に聞かれたので、球技、出来たらバスケがいいかなと言っておいた。

実際の所、何でもいいけどやるんだったら球技がいい。

月乃はじゃあ私もバスケにしよっかなと言っているが大歓迎だ。月乃の運動神経は並の男子より優れているし、きっと主戦力として活躍してくれる事、間違いないからだ。

「次は球技を決めるよ。今年はバスケ、バレー、ソフトが種目で、人数は知ってると思うけどそれぞれ5、6、9人だね。じゃあバスケをやりたい人は…」

ここぞとばかりに手を上げる。
月乃もやる様で手を上げている。

結局僕と月乃、それにバスケ経験者の宮内君と鈴木君、そして紫苑さんがバスケに出る事に。

他の球技のメンバーも決まった所で、千智先生は朱音ちゃんを席に戻すと、黒板に何やら書き始めた。

なになに…
『姫と騎士と時々、兵士』
何これ？

「千智先生、これって何？」

生徒の1人がそう聞くと、千智先生は胸を張り、こう答えた。

「善くぞ聞いてくれたね。これは今年の体育祭のメインで、これの勝敗で優勝が決めると言っても過言ではない代物だよ」

おぉー。
千智先生の言葉に歓声が沸き上がる。

「内容は、簡単に言うと鬼ごっこの様な物ね。そこに姫と騎士、兵士って言うポジションがあって、騎士が姫を守り、兵士が相手の姫を捕まえる。そんな感じかな」

千智先生の話を要約してみよう。
この『姫と騎士と時々、兵士』は兵士が鬼、姫が子、騎士は姫を守るという鬼ごっこらしい。

「その通りだよ光君。流石だね～」

お褒めいただきありがたいのですけど、皆に知られますよ、独身術。

「それもそうだね。うん、これからは気を付けるよ。ありがとう、光君」

気を付けてないって…。
それに独身ってからかったのにスルーだし…。
千智先生は天然なんですね。
今まで気付かなかった。

千智先生に対する、認識が高まった所で姫と騎士を決める事に。

「じゃあその姫と騎士だけど、月乃ちゃんと光君でいいよね」

千智先生の意見に頷く一同。
横を向くと顔を押さえた月乃が
「私が姫で光ちゃんが騎士…。私だけの騎士…。ふふっ」
と何処かの世界にダイブしている。
後ろを向くと、紫苑さんと朱音ちゃんがニヤニヤと僕を嘲笑している。

某坊主の様に考えてみよう。

ポクポクポクチーン

よし、一旦落ち着かせよう。

そう思い立ち上がると、

「おっ、光君。『私が姫をお守りします』とでも言うの？」

千智先生にからかわれてしまった。

怒る気もやる気も萎えてしまい、席に座るとチャイムの音が。

「各自、自分の種目の練習をゴールデンウィーク中にでもやっておいてね。それでは、さようなら」

千智先生はそう言うと、朗らかな笑顔を浮かべながら、スキップで教室を去って行った。

その結果、僕は騎士に月乃は姫になってしまった。

「はぁ…」

「どうしたの、光ちゃん？」

帰路の途中、月乃にそう聞かれたので何でも、と適当に返していると家に到着した。

ドアノブを回そうとしたら、月乃に

「鍵掛かってるから開かないよ」

と言われ、ドアノブに体重を掛けつつ、鍵を鞄から取り出そうとした。

ガチャリ

扉が開いた。

朝、鍵は閉めてきた筈…。
月乃も鍵が掛かってると言っていたし…。

となると、この現象は何故に？

「もしかして…泥棒？」

月乃が怯えた様子でしがみついてくる。

正か、と思ったものの、有り得ない話ではない。
最近は物騒なご時世だから、こんな真昼間でも泥棒は出稼ぎに出ているかもしれない。

「月乃、絶対に僕から離れないでね」

月乃にそう言い慎重に玄関に上がり、耳を澄してみたが物音1つしやしない。

荒らされているとしたらリビングなので、ゆっくりと近付く。

月乃は僕の制服をギュッと強く握っている。
大丈夫だよ、と頭を撫でていざリビングへ。

勢い良く扉を開け、部屋を見渡すとソファに少女が。

はぁ…。
良かった、泥棒じゃなくて女の子か…。
一安心だ。
「あっ、帰って来たんだ。おかえり～」
誰だか分からないが、礼儀として挨拶し返す。
「ねえ、月乃。あの子知ってる？」
「ううん、知らないよ。光ちゃんの知り合いじゃないの？」
うーん…。
謎は深まるばかりで。
仕方ないから聞いてみた。
「ねえ、君誰？」
「えっ…私の事忘れちゃったんだ…。お風呂に一緒に入ったり、一緒に一夜を過ごした仲なのに…」
とんでもない解答が返ってきた。
言っておこう。
僕はそんな事は決してやってない……筈。
兎に角、僕は無実だ。
だけど、月乃はどうしても僕を有罪にしたい様で。
物凄く冷たい視線を感じる。

此所は否定しなくては。

「月乃、僕はそんな事してないよ。君、僕達はそんな関係じゃないよね？」

「……ぽっ」

じぃ～～。

月乃が穴が開く程睨んでくる。

ダメだこりゃ。

僕の言葉ってそんなに信憑性ないんだ…。

まあ、そこの女の子が顔を赤らめてるから仕方ないけど。

手も足も出ない状態で、ため息を吐いていると女の子が立ち上がった。

「もう、光兄ぃったら本当に私の事、忘れてたの？」

ん、光兄ぃ？

うーん……あっ！

「もしかして、郁那（かな）？」

「やっと思い出したかぁ。まったく光兄ぃは昔からちょっと抜けてるんだから。」

やっぱりそうか。

暫く見ない内に、随分と変わってたから気付かなかった。

一人納得していると、月乃の疑惑の視線が強くなった。

説明しよう…。

「月乃、この子は僕の従姉妹の福元　郁那って子。まあ血は繋がってないけどね」

月乃は従姉妹なのに血が繋がってないという矛盾に頭を抱えている。

「郁那は母さんの弟の久遠（くおん）おじさんの結婚相手の悠希（ゆうき）おばさんの連れ子なんだ」

長い科白を1度も噛まずに言え、ちょっと感激していると

「だから結婚出来るんだよ、私達♪」

郁那が腕を絡ませそう言った。

それを聞いた月乃は、何だかプルプル震えている。

そして突然立ち上がり、

「何言ってるの？光ちゃんと結婚するのは私なんだから！」

と叫んで郁那を引き離す。

貴女も何言ってるの？

そんな疑問もそっちのけで不毛な言い争いを始めてしまった。

とりあえず、此所から逃げだそうと抜け足差し足忍び足でリビングを出ようとした。

しかし体が前に進まない。
足は踏み出している。
だけど進まない。

ビクビクしながら後ろを振り向くと、鬼の形相をした月乃と郁那が青筋を浮かべ、僕の襟を仲良く掴んでいた。

……2人共、仲良くなったんだね。
良かった…良かった…。

心の汗が頬を濡らしそうだったけど、2人の前で正座した。

「で、光ちゃんはどっちを選ぶの？」

「光兄ぃ、私だよ、ね？」

「光ちゃん、もちろん私だよ、ね？」

2人共、目笑ってないよ。
後、何が言いたいのですか？

「あの、そのね…えっと…」

「「あの、その、えっと？」」

「だから、つまり…」

「「だから、つまり？」」

２人共、ドスをきかすのやめて下さい。
恐いです。

現在の選択肢。

１、月乃を選ぶ。
２、郁那を選ぶ。
３、どちらも選ばない。
４、逃走を謀る。

状況的に、１、２、３はしちゃいけない。
というか、そんな事したら僕の命の保障が出来ない。

ならば、必然的に４だ。

そう思い、脱走。

またもや動かない。

脱獄失敗。

その後、鬼の様な２人に３時間説教をくらった。
夕食は抜きで。

僕が何をしたって言うんだぁ！！

第１２話　幼馴染みｖｓ従姉妹（後書き）

あけましておめでとうございます。
碧井です。

ようやっと課題の方に目処がつきました故、小説をと。

久しぶりなんで、微妙な仕上がりでしたが、読んでいただき、ありがとうございます。

今年も頑張って書いていこうと思っております。これからも宜しくお願いします。

第１３話　付和雷同・先利後義

やっとの事で２人を宥め、晩飯をありがたく頂いていると

「で、月乃さんはどうして此処にいるんですか？」

郁那が唐突に質問してきた。

月乃さんと呼んでいる辺りからすると、互いに自己紹介を済ませていた様だ。

「えっ、何でって此処に住んでるからだけど…」

郁那は月乃の言葉に驚きの色を隠せない、と言った顔で固まってしまった。

変な誤解を防ぐ為に少し言い足そう。

「実は父さん達と月乃のご両親がアメリカに仕事で行ってるんだ。それであの人達が一緒に住む事を勝手に決めて……あっ、だけど今はこっちが助かってるよ。……月乃といると楽しいし」

すると月乃が近付いて来て、如何にも嬉しそうに微笑んだ。

おもわず頭を撫でると気持ちいいのか目を細めている。

前方から殺気を感じ顔を向けてみると、怒りを顕にした郁那が僕を見下ろしていて。

「光兄ぃ…そんな事、何で言ってくれないの！！」

彼女はかなり御立腹の様です。
もう少し詳しく言うべきだったのでしょうか？
「私だって一緒に暮らしたいんだよ！」
……へっ？
「そんなんで、私も此処に住んでもいいよね？」
……ん、郁那何て言った？
此処に住む？
ああそうか……って何言ってるのこの子は？
「郁那、ちょっと待とうよ、ね？」
僕の宥めは意味を為さない様で、郁那はいいよね、とぐいぐい引っ張ってくる。
月乃、助けて。
月乃に目で合図すると気付いてくれたみたいで、
「郁那ちゃん、ちょっと落ち着こ。光ちゃん、混乱してるよ」
と言い、郁那を僕から引き剥がした。
何故に剥したのかは不明であるが。
「へっ？あっ本当だ。ごめんね光兄ぃ」
ふぅー……。

月乃、ありがとう。
この借りはいつか返すよ。
「郁那、そう言う事はいけないと思うんだ。それに久遠さんと悠希さんだって許さないでしょ？」
「それはお母さん達が許してくれたらいいって事だよね。じゃあちょっと電話借りるね」
郁那はそう言うと軽快な足取りで電話の前に行き、受話器を取った。
「……あっ、お母さん、私だよ。うん、そう光兄ぃん家だよ」
呆れて苦笑いしていると、月乃が話し掛けてきた。
「何だかややこしい事になってきたね…」
「うん…そうだね…。だけど多分大丈夫だよ」
僕の言葉が良く理解出来ていないのか、月乃は首を傾げている。
「……そう、うん、うん。分かった。うん、じゃあね」
郁那は電話し終わると浮かない顔の様で浮かれた顔の様な微妙な顔でこっちに歩いてきた。
「光兄ぃあのね、お母さんはいいって言ってくれたんだけど、お父さんが…」

思った通りだ。
久遠さんは許さないと思ったんだよね。
「じゃあ仕方ないけど、ちょっと無理「でね、私が引き下がらないで頼んでたら、こっちに引っ越そうか、だって」
ああ…はい。
あの微妙な顔はこれね。
「もちろんそうしたいって言ったら、ゴールデンウィーク中に探して明けには引っ越すって」
目前には今にも飛び上がりそうな郁那。
横には安堵の表情を浮かべた月乃。
何で月乃がほっとしてるのだろう？
謎は深まるばかりです。
そういえば、郁那は高校どうするのだろう？
そんな疑問が生まれ聞いてみた。
「郁那は高1だよね？高校は何処にするの？」
しかし郁那からの返答はなく、高校は何処かと質問で返って来た。
「渚高校だけど…」
「じゃあそこで」

……随分と適当なんですね…。

「渚高って進学校だけど、郁那ちゃん大丈夫？」

月乃の問いにええ、と笑顔で郁那は答える。

でも簡単に入れる訳じゃないよな…。

何かないかな？

ピンポーン

考えていると突然チャイムが鳴る。

月乃が出て行こうと立ち上がったが、それを制して玄関に向かった。

扉を開けると、肩に竹刀を乗せた爺ちゃんが。

「久しぶりじゃの、光。元気にしとったか、おなごにちょっかいでも出しとったか」

うぎゃあー！！

爺ちゃんだぁ！！

殺される、殺される！

逃げなきゃ！！

「何を言っておるんじゃ、殺しはせんぞ。半殺しにはするかもしれんがの」

半殺しにはするんだ…。
ははははっ……はぁ…。
って、心読んだよ、この人。

「まあこんな所で立ち話もなんじゃから、とりあえず上がるぞい」

爺ちゃんはそう言うと、ズカズカ家に上がってきた。

「……ふむ、そう言う事かの」

こう言う時は老人の知恵を借りようと事情を説明すると、爺ちゃんはおもむろに立ち上がり、電話をかけ始めた。

「どうしたんですか？」

「ちょっと知人に電話をするだけじゃよ。すまんが少し静かにしていてくれんかの」

「……皓一じゃが、雨琉（うりゅう）はおるかの？ん、雨琉か、久しいの。それでなんじゃが……」

爺ちゃんは“うりゅう”という人に電話をしている様だ。

「ああ、頼むぞ。ん、楽しみに待っておる。それではまたの」

爺ちゃんは受話器を置くと、郁那に話し掛けた。

「郁那、渚高の転校大丈夫じゃぞ。テストも受けなくていいそうじゃ」

「本当、お爺ちゃん！ありがとう♪」

郁那は爺ちゃんの腕をぶんぶん揺さぶっている。

いやいや何したのよ、この人。

「なあに、校長にして理事長の親に話しただけじゃぞ。光も知っておると思うがの」

あっ、そういえば爺ちゃんと校長は親友だったっけ。

でもそんな事していいのか？

「光は頭が堅いの。もう少しズル賢く行かねば、この世の中やってけんぞ」

そうだった、この人の座右の銘は

『先義後利でなく先利後義』

らしいから…。

勝手に四字熟語を作っちゃいけませんよ…。

まあいいや。

郁那が渚高に入れる訳だし。

「ねえお爺ちゃん、渚高校って何で渚なの？ここら辺って波打ち際何てないよね？」

余計な思考を止めお茶を啜っていると、郁那が手を顎に置いてそう聞いた。

確かにそれは僕も疑問だった。
燈陵は桜の名所なのに何で渚？と去年は考えていたのだ。
結局答えは出なかったけど。
「そんな事かの。ふむ、じゃあ昔話でもするとしょうかの」
爺ちゃんはそう述べた後、一息吐いて重々しく口を開いた。
「あれは儂が胎児だった時の話しじゃ…」
つまらない冗談はやめようよ…。

第１３話　付和雷同・先利後義（後書き）

皆さん、ご無沙汰しておりました。

気付けばこの小説を書き始め、早１ヶ月が過ぎています。

今でも文章力の向上が見られない私ですが、これからもどうぞ宜しくお願いします。

尚、今後は１週間に１度は投稿したいと思っています。

閑話　渚の傍らで

結婚式。
それは愛し合う男女が永遠の愛を誓い合う場。
それは俺達にとっても例外でなく、今こうして向かい合っている。

ウェディングドレスを着た彼女はとても綺麗で、この日を迎えられて本当に良かった、そう強く実感する。

長い間、迷い続けてきた。
長い間、悩み続けてきた。
その末、辿り着いた自分の居場所。
自分のすぐ横にいた、大切な場所。

大勢の知り合いからの祝福の中、俺達は誓いのキスを交わした。

「…川、……瀬川」

自分の名を呼ぶ声がする。

目を開けてみた。
眼下に広がるは至極普通な授業風景。
教室にいるのはおよそ３０人ほどの生徒と、赤鬼の如く怒りを顔に出した教師１名。

彼、榊原教諭は授業中にもかかわらず、惰眠を貪っていた俺が気にくわないらしい。
何度か俺の名を呼び目が覚めたのを確認した後、不気味な笑みを浮かべ

「廊下に立ってろ」

嘲笑うかの様に吐き捨てた。

「ホント、あんたは榊原に目の敵にされてるわねぇ」

授業終了後、教室の中に入った俺に浴びせられた言葉はいつもの皮肉の混じったこいつ、柏崎　渚の言葉。

渚なりに気を使っているので、言い返すに返せない状況。
結局、今回も適当に流した。

「そうだっ、今日家来ない？母さんが『皓一君ぐらいの美形がいないと飯が旨くない！』ってうっさいのよ」

渚はいつもそうやって俺を家に招き入れる。
断る理由もないので、いつもお邪魔になっている俺が言える立場にいるかどうかは不確かであるが。

「ん、じゃあそうさせてもらおうかな？」

「うん！今日は私が夕食作るからいっぱい食べてよ」

ああ、期待していると渚に目を移す。

腰まで伸びた黒髪。
長い睫毛に黒く大きな瞳。
すらっとした鼻だちに、ふっくらとした小さな唇。
天使を鏡に写した様な美少女（自称）が俺の2人いる幼馴染みの1人。

もう1人は柏崎　雨琉。
雨琉は渚の双子の弟。
しかし性格から頭の善し悪しまでまったく一致せず、今は町の方の進学校に行っている。
なんでも教師になって、子供達の道標になりたいらしい。

因みに俺は瀬川　皓一。
職業は惰眠家…じゃなくて高3。
成績もやる気も非常に低い為、進学は考えてない。

時は流れ、放課後。渚に促されつつ1度帰宅し、母さんに渚に厄介になってくると告げる。
俺の両親は放任主義なので、嫌な顔1つせずに見送ってくれた。
渚は母さんに一礼し、俺の手を強く握り締めて歩き出す。
面白い奴。
そう思いながら渚の手を握り返し、並んで歩いて行った。

「そうそう雨琉ったら皓一、皓一って煩いのよ。いっその事、あいつのお婿さんになってくれない？」

俺達はさっきからこんな何でもない馬鹿話に花を咲かせている。

雨琉は受験勉強に勤しんでいて、食後少し話せたかと思ったらすぐに自室に籠ってしまった。

とまあ話しは変わるが、渚の手料理は頬が落ちるほど美味しかった。

彼女も俺がご満悦といった表情をしていると嬉しそうに笑っていたので、来て良かったと実感する。

こんな日々が永遠に続けばいいのに…。

そんな非現実な願いが浮かぶほど、幸せな空気が俺達の周りを漂っていた。

そんなこんなで明日は卒業式。

とうとうこの学び舎から飛び立つのか…と惜別の思いで学校全体を眺める。

所々ひび割れ、汚れた校舎。

大きなケヤキと1列に整列した桜。

大それた物じゃない、極普通な学校。

だけど、そこには沢山の思い出が詰まっていて。

桜咲き誇る春には渚と一緒に屋上で1日中蒼空を眺めた。

太陽輝く夏には文化祭で馬鹿をやった。紅葉もえる秋にはコッソリ焚火(たきび)で焼芋を作った。
雪舞い落ちる冬にはストーブの周りで談笑した。

どんな時も傍らには渚の姿があった。
目を瞑れば浮かび上がる渚の豊かな表情。
笑い顔、怒り顔、泣き顔が晴れの日も、雨の日も、曇りの日も、嵐の日も隣りにあった。

俺は四六時中、渚の事を考えていた気がする。

もしかすると、これが『恋』という物なのかもしれない。

だけど渚には許婚がいる。俺なんかよりもずっと格好良くて、将来性もある奴が。

そんな状況下で渚が俺と付き合う確率など皆無に等しい。
いや、絶対に有り得ないだろう。

この気持ちは自分の胸の中にしまっておこう。
そう決心した。

高校卒業後、俺はイギリスに行く事に。

父さんは世界でも名を轟かす武道家で護衛人、つまりボディガードをしている。
今度はイギリス王家の護衛顧問として働く事になったのだ。
その際、俺の話を現英国王に話したところ痛く気に入り、連れて来るようにと命ぜられたらしい。

もう渚と会えなくなるのか…。
そんな惜別の思いが頭の中に走った。

このまま渚に自分の気持ちを隠し通すのか？
このままで納得してイギリスに行けるのか？

答えは否、だ。
振られてもいい、だけどこの思いを伝えたい。

気付いたら渚の元に走って、思いを告げていた。

「……んとさ…私、皓一の事、そんな風には…思えない、かな…」

振られる覚悟はできていたが、実際に振られるとなると話は変わる。

今までの丁度いい距離で良かったのかもしれない。

それから数週間後、俺は逃げる様に日本を発った。

向こうでの日々は決して楽な物ではなかった。
護衛を任された第二王子であるラミエル王子は自由気ままな人で、俺を連れ回し世界各国を飛び回ったのだ。　ラミエル王子は無類の格闘技好きで行った国々の格闘技を極めさせられ、それらを自分なりに昇華させて護衛に役立てていた。

忙しく充実した毎日。
だけど胸に穴が開いた様な物悲しい感情が溢れ出して。

どんなに言い聞かせても、どんなに忘れようとしても渚の笑顔が、笑い声が浮かんでくる。

自分の感情を押さえる為、徹底的に体を鍛えた。
只がむしゃらに、無理矢理に。

そんな中、父さんの契約期限が終わった。
2年後、俺が20歳の時であった。

王は渋り、契約期限の延長を求め、父さんは悩んだ末、俺を日本に帰す事を条件に王の交渉に応じた。

帰国した俺を出迎えてくれたのは、雨琉だった。
渚はやっぱり来ていない。

「なあ皓一、お前に聞きたい事があるんだ」

車を走らせながら雨琉が問う。

何だ？と聞き返す。

「姉ちゃん振ったって本当かよ」
はっ？
意味が分からない。

「お前があっち行ってすぐ、強がった表情で言ってたんだ。『いや～皓一に振られちゃったよ～。やっぱり私じゃ不満だったんだね～』ってさ」

「雨琉、俺をからかっているのか？逆だよ逆。俺が告白して振られたんだよ」

その冗談は俺への当てつけか？
だったらふざけんな。

「はっ？何言ってんのお前。お前が振ったからあんなにギクシャクしてたんじゃねぇのか」
冷静沈着な雨琉が突然声を高らげる。
この様子を見るに雨琉はからかっている訳ではないだろう。

となると渚が出鱈目を言った事になる。
しかし何で？
いくら考えても答えは見付からなかった。

重い空気が流れる中、俺達は渚達の家に到着した。

玄関を抜け、床の間に入る。
そこにも渚はいない。

聞く所によると少し前に自室に籠ってしまったという。
この何とも言えぬ違和感を解消する為、渚と直接話さなければならない。

そう思って渚の部屋の前まで来てみた。

「渚、俺だ。ちょっと入ってもいいか？」

ドアをノックしながら問い掛けた。

「……うん、いいよ…」

パッとしない返事だが、肯定には違いない。

部屋の中で渚はベッドの上にクッションを抱いて座っている。

置いてあった座布団に腰を下ろし、気になっている事を聞いた。

「雨琉から聞いたぞ。何であんな嘘ついたんだ？」

渚は只俯くだけで、何も言わない。

だんだん苛立ってきて、

「渚、何とか言えよ」

強い口調で怒鳴ってしまった。

しかし渚が口火を切る事はなく、時計の針がいたずらに時を刻むだけで。

半ば諦めて腰を持ち上げる。

そのまま部屋を出ようとすると、渚に引き止められた。

うざったく感じ、渚に何か言おうと振り返る。

だけど、何も言えなかった。渚の頬が涙で濡れていたから。

渚が落ち着くのを待ち、もう1度問い掛けてみる。

「……あのね、私に告白したって知られたら、皓一が責められるんじゃないかなって…」

そんな事…。

「それにイギリス行くのに、悪いレッテルを貼られるんじゃ皓一があんまりだって思ったんだ…」

そんな事…どうでもいいのに…。

「なあ渚、お前は何か言われなかったのか？その…相手の人に」

「ううん…言われ、なかったよ」

渚は俺に気を使っているのだろう、言葉を濁す。

「なあ、何でそんなに俺を気遣う？俺に何を求めているんだ？」

気付いたら、そう言っていた。

「何でって、何を求めてるって……私は…皓一の事が好きなんだよ、許婚何て関係ない、只、皓一が好きなの」

衝撃が駆け抜けた。

渚が俺の事が好きだった何て…。
知る由もなかったから。
「ねぇ皓一、我が儘だし自惚れだって分かってるけど…まだ私の事好きだったら、その…付き合ってくれるかな」

渚が言い終わるが早いか、俺は彼女を抱き締めていた。

お互いの気持ちが通い合い、俺達の影は重なった。

それからという物、俺は働きに働いた。
無論、渚との関係を認めてもらう為に。

とは言ってもつまらさ故に普通の企業はやめてしまった。
結局、世界各国での経験を生かし、格闘技でファイトマネーを稼ぐ事に。

あらゆるプロ試験を受け、手当たり次第試合をする。
次々と勝ち進み、気付けば十数個のタイトルを手にしていた。

ようやく経済的に渚を養える様になり、おじさんに俺達の事を許してもらう為、お願いしに行った。

最初は正面に聞いてくれなかったおじさんも、毎日通うと

「渚を悲しませたら許さん」

と言い、ある条件を呑む事で認めてくれた。

俺達の努力が実った瞬間だった。

永遠の愛を誓い合ったこれからの道中は厳しいだろう。
だけど、それ以上に面白いに違いない。
いや面白くするんだ。

こいつと一緒に一生笑って生きていきたいから…。

閑話　渚の傍らで（後書き）

はい、という事で投稿です。
ぶっちゃけ、今週は書くの止めようかと思ってました。
部活の大会もあったもので。

しかし、つい先週誓った事をすぐ破るのは人間としてどうなのだろう？

頭の中からそんな問いが聞こえたので、体に鞭を打ち筆を取りました。
お陰様で腕が上がりませんが…。

と、今回は皓一目線ですね。
コメディーのコの字さえ見つかりませんが、気にしないで下さい。

そんな余裕はなかったんです…。

第１４話　僕の…

爺ちゃんにそんな過去があった何て思いもしなかった。
普段呑気そうな顔して……まあ、今は真剣な表情だけどさ。

だけど渚高の名前の由来に触れてないよね？

「結局何で渚になったんですか？」

僕が聞くより早く、月乃が質問していた。

「ああ、まだ言っておらんかったの。
ふむ…渚のお父さんが出した条件があったじゃろ。あれがそれじゃ」

それで渚高を作った、と。
ああ、納得ですな。
ん？納得？

……つまり、爺ちゃんが渚高の創始者って事なのか？
……いやいや、流石に無理でしょ。
散々稼いでたとは言え。

「まあ、儂一人では出来なかったじゃろう」

やっぱりそうだよね。
でもそうすると、何か大変な事を……はっ、まさか銀行強盗！？

「渚の許婚だった人がの、協力してくれたんじゃ。
向こうも色々とあったんじゃろう」

ちょっと安心。

話を戻す為に問い直す。

「そんなに聞きたいか、光？ふむ、ちょっと肩が痛むの……」

こっちをチラチラ見ながら、切なげな表情で肩を叩く爺ちゃん。
うぅ……最初は何にも言ってなかったのに…。

仕方ないので肩を揉んでいると、

「ちょっと喉が渇いてしもうた」

これまた切なげな表情で。

こうなったらとことん付き合ってやろうじゃないか。

急いでお茶を入れて持って行くと、今度は煎餅を要求される。
それも、何故か仙台名物（？）牛タン煎餅を。

そんなのここらじゃ売ってないってー！！

心の叫びが聞こえる訳がない。
有無を言わずに家から追い出されてしまった。

デパートで物産展をしているかもしれない、という僕の記憶を頼りに自転車を漕ぎ出す。

数分後着くと、案の定物産展をやっている。
傍から見ればおかしいだろうが、牛タン煎餅だけを購入し店を後に。
更に数分、煎餅片手に家に入る。
「……という訳なんじゃよ」
もう話し終わっていた……。
僕の頑張りは徒労に終わったのですか？
爺ちゃんは僕に気付くと顔をほころばせ、煎餅を奪ってスキップしながら帰っていった。
満身創痍で立ち尽くしていると、郁那が目に止まった。
いつまで此処に居座るつもりだろう？
月乃と楽しげに会話してて、帰る気無さそうだし……。
「ねぇ郁那ちゃん、そろそろ帰らなくていいの？」
「それだったら心配ご無用です！
さっきの電話で許可取りましたから」
「許可って、泊まってくの？」
笑顔で頷く郁那。
そして近付いて来る。
「ねえ光兄ぃ、泊まっていってもいいよね？」
こんな時間に帰すのも少し忍びないし、仕方ないか。

大丈夫だよ、とお泊まりを許した。
「やたぁー！じゃあ私、光兄ぃと一緒に寝る！」
「か、郁那ちゃん、私の部屋で一緒に寝よっ、ね？」
郁那は月乃の提案に顔を渋らせたが、そうする事になった。
ありがとう、と口パクで伝える。
月乃はウインクをすると、郁那を部屋に連れて行った。

ふぅー。
ため息が自然とこぼれる。
なんだか今日は疲れた。
もう寝てしまおうかと思ったが、ちっとも眠気がやって来ない。
仕方ないから数学の教科書を開き、予習をしているとノックの音が。
「光ちゃん、私だけど入っていい？」
返事をすると、ちょっと困った顔で入ってきた。
何かあったのだろうか？
「月乃、どうかした？」
「うん、郁那ちゃんがもう寝ちゃって。起こしたらマズいなぁってね」

「それで此処に避難した、と」

そうだね、へへっと笑う月乃。

うーん、せっかくだし渚高の由来を聞こうかな。

「ねえ月乃、渚高の事なんだけ「そうだ、ちょっと散歩行かない？きっと星が綺麗だよ」

何か誤魔化された様な気がするけど、まあいいや。今聞こうが、後で聞こうが変わらないし。二つ返事で家を出た。

外に出ると、少し冷たい風が僕達を撫でる。もう5月だと言えども、まだ気温はそんなに高くない。

月乃は薄着で出てきた為、震えている。風邪をひいてしまうと大変なので上着をそっと掛けてあげた。

「えっ、あの光ちゃん？」

「寒いでしょ。僕は大丈夫だから着てて」

「……うん、ありがと」

月乃が羽織ったのを確認し、肩を並べて歩き出す。

見上げると一面の星空。

雲一つない、綺麗な夜空がそこに広がっていた。

「綺麗だね」

「うん、綺麗だ」

それだけの会話。

だけど何か伝わった気がして、微笑み合った。

適当に町内を一周し、家の近くまで来たところで、月乃が立ち止まる。

続いて立ち止まると、月乃が口を開く。

「あのね、光ちゃん。ちょっと聞いて欲しい事があるんだ……」

真剣な表情の月乃に、思わず唾を飲み込む。

大きく深呼吸をした後、言葉を紡ぎ出し始めた。

「私ね、ずっと、ずっと……す、す……」

す？

「……す……す」

す、す？

「す、すきっ」

「へっ？スキー？」

「ふぇ？」

なんだ、スキーしたかったのか。
それならそうと言ってくれたら良かったのに。

「じゃあ、今年はスキー行こうか？」

提案して月乃の顔を窺う。
あれ、なんだか怒ってません？
僕、何かしました？

「……光ちゃんの、光ちゃんの……ばかぁぁあ！！」

月乃は僕を罵倒すると、物凄い速さで家に入っていった。

残されたのは疑問符を浮かべた僕と、地に落ちている月乃に羽織らせた上着だけで。

はぁ……。
これで何度目のため息だろう。

日がかわり、郁那が久遠おじさんに連れてかれてから月乃と会話していない。
それ所か部屋に籠ってしまっている始末。

そんな訳で、一人寂しくテレビを見ている。

何とか解決できないものか。

頭をフル回転させ思考するが、いい案は出てこず、いたずらに時が過ぎていく。

項垂(うなだ)れてソファに蹲(うずくま)っていると、お天気お姉さんの声がする。

顔を上げてみると、お姉さんが葉書を読んでいた。

「次はペンネーム『愛よりお金』さん、２０代の女性からのお悩みです。
なになに……私には同棲している彼がいるのですが……」

本当に何でもやってる人だなぁ……。
ちょっぴり尊敬。
……てか、愛よりお金な人が恋愛相談するなよ。

「そう言う事は良くある事だけど、軽く考えるのは命取り。ちゃんと言ってあげましょう。
『ちゃんと生活費払えや！！』ってね」

やっぱりお金だったー！！
流石は『愛よりお金』さん……一筋縄ではいかない。

「はい、という事で今日のお便りはこれで終わり。
この『あなたのお悩みすっきり解決……かも』はまだまだお便り募集中です！そこの君もじゃんじゃん送っちゃおう！！」

かもって、随分アバウトですね。
にしても、お姉さんに相談……いいかもしれない。
放送されないと思うけど、やってみる価値はある。

早速葉書を書いて投函した。

それから二日。
まだ僕の相談は放送されない。
そして月乃と話せてない。

僕ってダメだなぁ……。

落ち込んでいると、月乃が部屋に入ってきて、向かいのソファに。

相変わらず目線を合わせてくれないが、避けられはしなかった。

「はい、という事で『あなたのお悩みすっきり解決……かも』のお時間です」

うーん、今日はやるかな？

「一つ目のお悩みです。ペンネーム『ヒカリ』君、十代の男の子からだね」

おっ、遂にきた。
ペンネームは光の読み方を変えただけ……。
月乃に気付かれないよね？

「えっとですね……僕は最近、身近な女の子と仲が余り良くありません。原因は良く分からないのですが、もしかすると彼女の言葉を聞き間違ったのかもしれません。
僕は何をすべきなのでしょうか？

……だそうです。
えー……これはほんのちょっとのすれ違いが起こってるのかもしれないね。今度会った時に、ちゃんと話してみよう。
きっと仲直りできるよ♪」

そうなのか？
だけど、まあ後で話してみよう。

「次のお悩みはペンネーム『ムーン』ちゃん、十代の女の子からだよ」

ん、月乃がピクッと動いた？
気のせいかな？

「私には一緒に住んでいる人がいます。その彼は凄く鈍くて、私の言葉を違う意味で取ってしまって……それ以後ギクシャクした関係なんです。
どうしたら今までの仲に戻れるでしょうか？
……だそうです。
多分これもヒカリ君と同じく、只のすれ違いだね。二人でちゃんと話し合えば上手くいくよ。
二人の気持ちはきっと同じなんだから♪」

うわー、お姉さん格好いい……。
よし、僕も頑張ろう。

そう思い月乃に目を移すと、目線が重なった。
恥ずかしかったが、ここでずらすと意味がない。
ちゃんと向き合うと決めたのだから。

「「あの」」

科白が重なる。

「「あっ、先いいよ」」

これまた重なる。

埒が明かないので、先に言う事にした。

「月乃、まずはごめん。僕が聞き間違ったんだよね？
それで、あの時何て言ったか教えて欲しいんだ」

暫しの静寂が僕達を包む。
だけどそれは直ぐに終わった。

「ううん、私こそごめんね。あの事は忘れてくれていいから……」

あの事が原因なのだから、今さら掘り下げても意味はない。

「うん、分かった」

「ありがと、じゃあこれで仲直りだね♪」

仲直りの証として手を前に出してくる。
しっかりと握手を交わすと、満面の笑顔が咲いた。

これが見れただけで安心している自分がいる。
僕って本当に月乃が必要なのかもしれない。
不覚ながらもそう実感した。

「ねえ光ちゃん、もしかしてヒカリって光ちゃんだったりする？」
突然の問い掛けに驚くも、ぎこちなく肯定する。
すると月乃の目元が柔らかくなった。
聞いてみると
「光ちゃんって、ちゃんと私の事考えてくれてたんだなあ……って思ったら、なんだか嬉しくて」
てへっと笑う月乃がいつも以上に可愛くて、ドキッとしてしまった。
もしかすると、『恋』してるのかもしれない。
そんな思いが頭をよぎった、今日この頃。
ムーンって人の悩みもちゃんと解決するといいなあ……。

第１４話　僕の…（後書き）

終わったぁーー！

今の切実な感想です。何が終わったのかは聞かないで下さい。……

色々とあったんで。

それでは、失礼致します。

第１５話　迷いと始まり

カーテンを開けると、外は一面の曇天。
今にも雨が降ってきそうな様子のどんよりとした雨雲が、空を覆っている。
無論、青空どころか晴れ間さえ確認出来ない。

普段は傘を持って行かなくては、ぐらいにしか思わないこの天気も、今日ばかりは本気で晴れて欲しいと願う。

何て言ったって今日は一年に一度の体育祭なのだ。
雨なんか降って台無しにされて堪るかという話である。

いるかどうか良く分からないが、神様に祈っておく。

お祈りを済せ、念の為に照る照る坊主を二つ、三つ作り、軒下に吊して気付く。
やっている事が運動会、又は遠足を前日に控えた小学生の様ではないか、と。

自分の行動の幼稚さに少し呆れたが、恐らくこれが僕なのだろう。
そう自分に言い聞かせ、しばしの現実逃避を。

さて、これから何をしよう？

現実に戻ってきた時に最初に考えた事。

二度寝して、月乃が起こしにきてくれるのを待つというのも一つ

の策だ。
だけど、そんな事はしてはいけない。
月乃は使い勝手のいい家政婦、言わばメイドではないのだから。
しかしながら、よくよく考えると平日はそれが普通になっている気がする。
これからはちゃんとしよう。
そう決意し、先ずは着替える。

その後、次の行動が決まらず、右往左往していると、お腹の虫が鳴る。
……昨日、お腹を壊した為にあまり食べていなかったのだ。

己の欲する所に従う事にする。
冷蔵庫に何かしら入っている筈だ。

リビングに降りるともう月乃がいる。
時計が指している時刻は６時。
ちょっと早い気がしたが、月乃にとっては普通なのだろう。

おはよう、と声を掛ける。

月乃はピクリと体を震わせ、あの光ちゃんが……と呟きながら、ぽかんとした顔で僕を見つめている。

一人で起きてくるのがそんなに珍しいのですか？

改めて己の不甲斐なさを確認させられ、視線を落とす。
ため息を吐こうと息を吸った直後、再びお腹の虫が鳴き出した。

「お腹空いたから起きてきたの？」

全てを見通している母親の様な質問に、只頷くしか出来ない。
月乃はくすくす笑うと、おにぎりを二つ渡してくれた。
お礼を言い、おにぎりを頬張ると絶妙な塩加減と梅干しの酸っぱさが口の中に広がる。
頬が落ちるほど美味しい。
お世辞抜きでそう思える美味しさに、息をするのも忘れ食べ続けた。
月乃はまたもやくすくすと笑い、台所に戻っていく。
ぺろりと完食し、手伝う為に月乃に近付く。
彼女はおにぎりをせっせと握っている。
それはそれは手が何本にも見える程の速さで。
その結果がこれ、おにぎりの山である。
富士山の如きそれは台所に高く積まれ、その姿からは神々しさを感じられる。
「そんなに作ってどうするの？」
「ん、クラスの皆に差し入れとしてあげようと思って」
なるほど、クラスのやる気を上げる作戦ですな。
感心して頷いていると
「これ光ちゃん持ってくれる？」
とお願いされた。
この山を持って学校まで辿り着けるのか大いに疑問だったが、引

き受ける。
月乃はお願いと手を合わせ、またおにぎりを握り出す。
僕も手伝い、程よい所で朝食を取る事に。

テレビを付けながら箸を進めると月乃が声を掛けてきた。
「光ちゃん、今日のバスケ、絶対優勝しようね♪」
「うん、優勝しよう」
言い合った後、へへっと笑う月乃。
突如、心臓が鼓動を速める。
あの日から月乃を妙に意識している自分がいて。

やっぱり月乃の事、好き、なんだ。
しかし、月乃はどうなのだろう？
誰か好きな人がいるのだろうか？
いるとしたらその人は、羨ましい……。

「光ちゃん、どうしたの？具合悪いの？」
月乃に言われ、物思いに耽っていた事に気付く。
何でもないよ、と返事をすると心配そうに見つめてくるが、納得してくれて、ぱくぱくとご飯を口に運んでいた。

時計を見ると、お馴染みの占いの時間。

「はい、今日もやっちゃいます。お天気お姉さんの今日の占いだよ♪
それでは、第1位は牡羊座の貴方です。今日の運気は絶好調！何を
やっても上手くいくよ♪」

嬉しいし、気持ちも高ぶる。
だけど、言葉では言い難い何かが、僕の中を満たしていて、ほとん
ど聞いていなかった。

「……第3位は蟹座の貴方。今日は気になる人と近付けるよ。積極
的なアプローチが幸運の鍵」

途端、顔を輝かせる月乃。

やっぱり好きな人がいるんだね……。
胸が締付けられる。
その笑顔の先に映っている人は誰なの？
せめて僕の知らない人であって欲しい。
そう、切に願う。

朝食を食べ終え、おにぎりを重箱に詰めて家を出る。
重かったが、今の僕には丁度いい。
いつまでも暗い気分では、せっかくの体育祭が台無しになるから。
そう思い歩を進めた。

――開会式。
体育館に全校生約４８０人と教職員約４０人が入っている。

その割にゆとりのある事からも、ここの広さがうかがえる。

今は体育の先生が注意事項と、簡単なルール確認、今日の日程を話している。

今年も組対抗制度をするらしく、得点がどうだこうだ、順位があだこうだと説明しているが、大半の生徒は耳を傾けてさえいない。

僕も同様に聞き流し、明後日の方向を眺めてため息を吐いた。

「どうしました、悩み事でもあるのですか？」

隣りにいた紫苑さんが、首をかしげ聞いてくる。

悩み事、か……。

ちょっと相談してみようかな。

紫苑さんに最近月乃を妙に意識してしまっている事、月乃が誰かを好きなのではないかと不安になる事等を話す。

彼女は神妙な面持だったが、話し終わるとプルプル震えて始め、終いにはプッと噴き出した。

人が真剣に相談しているのに、と腹が立ち、何かあった、と不機嫌な声で問い掛ける。

「いや、すみません。前にも似た様な相談をされたものですから、つい……。

それはそうと、月乃でしたら大丈夫ですよ」

「全然大丈夫な意味が分からないんだけど……」

「ふふっ、兎に角大丈夫です。なんなら賭けましょうか？」

自信満々紫苑さんの顔が、余りにも説得力があるものだった為、納得させられてしまった。

「でも何でそう言えるの？」

聞くと、彼女の視線が揺らいだ。

おかしい……何かあるな。

根掘り葉掘り聞き出そうと、再び口を開く。

「ねえ、何でそ「皆さん、おはようございます！明日の『姫と騎士と時々、兵士』、略して『姫騎士』について説明したいと思います」

突然の大声に遮られ、紫苑さんはチャンスとばかりに壇上に顔を向けてしまった。

どこのどいつだ。

顔を拝もうと壇上に目を移す。

そこには朱音ちゃんがマイク片手に微笑んでいた。

いつの間かにか体育委員長まで上り詰めていた……。

驚きつつも、話を聞く。

「この『姫騎士』は此処、体育館で行います。と言っても、今からトラップやギミックを張り巡らせる為、気を引き締めておいて下さい。

対戦方式ですが、今日とはうってかわり全学年入り乱れて闘っても

らいます。
対戦相手は事前にクジをもって決定いたしました。後に配る冊子に印刷されていますので、確認しておいて下さい」

はい、確認しておきます。

「次に、姫と騎士の衣装ですが、姫はドレスにティアラ、騎士は騎士服にマントを着て下さい。これらは第二特別教室に置いてあります。好きな色を選んで各自持って行って下さい。
尚、姫以外の生徒は頭に風船を付けます。これが破られると失格です。
これは設置されるカメラで確認次第、放送します。名前を呼ばれた生徒は速やかに退場して下さい」

姫、騎士の衣装……コスプレですか？

「続いて勝利条件です。
1、姫のティアラを奪う。
2、1を満たさない場合、制限時間の20分が終了した後、残っている人数が多い。
3、1・2を満たさない場合、騎士が姫を『お姫様抱っこ』して100m走で勝利する。
以上、三つです」

三つ目辛いな、おい。
100mはヤバいでしょ。
まあ、それまでに決着つければ問題ないけど。

「最後に反則について話します。
1、ティアラ、風船以外の場所を故意に狙う。

2、度を過ぎて攻撃をする。
3、武器の持ち込み、及び使用。
これらの三つが起きても放送でお知らせします。
これにて説明は終わりです。長々とありがとうございました」

その場で一礼した朱音ちゃんと入れ替えに良く分からない人が壇上に上がる。

「最後に理事長の私からお話しさせて頂きましょう。
今回の体育祭、各担任の先生方から聞いていると思います。
増額は本日の優勝組に各五千円、明日の『姫騎士』の一位から三位にそれぞれ五千円、三千円、二千円です。
えっ、教育委員会から苦情がきている？そんな事は無視しましょう♪黙っていたら分かりませんよ。
それでは、本日、明日共に全力を尽くしましょう」

理事長の言葉に会場がざわめきだす。
普通の学校関係者は教育委員会に頭が上がらないのに、この人は気にしないどころか無視しろとまで言ってのけた。
生徒のテンションが上がらない訳がない。

僕もかなりハイになってるし、いつも物静かな紫苑さんもはしゃいでいる。

「光ちゃん、バスケも『姫騎士』も優勝だからね♪」

月乃がトコトコ歩いてきて、そう言う。

今まで悩んでいたのが何だったのか、と思うくらい僕の心は晴れ渡っていて、彼女の言葉をそのまま受け止められた。

「勿論、そのつもりだけど？」

おどけて言うと満面の笑みが、目の前に現れる。

「光ちゃん、行こっ」

月乃が人目を憚（はば）らずに手を前に出してくる。

恥ずかしかったが、久しぶりに手を繋いだ。

すると、背後から二つの笑い声と沢山の叫び声が。

二人して振り返ると、沢山の目がこちらに向いていた。

中には羨望の眼差しや、殺意の籠った視線もある。

どちらがともなく二人一緒に走り出していた。

手を繋ぎ、笑い合いながら……。

第１５話　迷いと始まり（後書き）

一つご報告がございます。恐らく今月中はもう書けないかと思われます。原因と言っては何ですが、学年末テストが近付いてきていまして。今回落とすと、次はないんです……。

第１６話　溢れる情熱と迸る汗

試合時間、残り十五秒。僕達のゴール下からのスタートだ。

時間的に考えて、残りワンプレーであろう。得点は相手チームが一点上回っている。故に、ここで入れなければ……敗北が決定してしまう。

勝ちたい。いや、勝つ！　絶対、勝つ！

呼吸を整えて、パスを受け取る。

上がりながら見渡すと、月乃がフリー。フェイントをかけてノールックパス。

誰にカットされるでもなく、月乃の元にボールが行った。

月乃はテンポのよいドリブルで相手を躱し、宮内君にボールを渡す。

ボールを手にした宮内君は、疾風の如く駆け上がり、シュートを放つ。

ボールは綺麗な放物線を描きながら飛んで行き、ネットにおさまった。

十対九で、我らが二組の勝利である。

シュートを決めた宮内君は髪を掻きあげ、爽やかな微笑みを周囲

に振撒く。黄色い歓声が沸き起こり、彼の周りを取り囲んでいる。

僕と鈴木君はちょっと離れた場所から、そんな宮内君を眺めていた。

「けっ、何が『宮内君、格好良かったよ♪』『宮内君、素敵すぎ♪』だ。あんな野郎のどこがいいんだよ。俺だってあいつと同じぐらいシュート決めたのに……」

彼のぼやきは大いに理解出来るが、声に出したら人生の敗北者みたいなので……やめた。

神は二物を与えないというが、明らかに嘘であろう。目の前の人物は二物どころか三物も五物も与えられているだろう。そうに違いない。

「……はぁー」

何となく切なくて、ため息がこぼれる。

「どうしたの光ちゃん？」

はっと思い出した。そこには月乃がいた。

「月乃、ありがとう。意味分かんないだろうけど、ありがとう」

へっ、と首を傾げて目をパチクリさせているが、それでも構わない。そこに、僕の側にいてくれる、その事だけで充分だ。

「こ、光の裏切り者！！」

月乃の手を両手で握ると、背後からそんな悲惨な叫びが聞こえる。

今叫んだ鈴木君、もとい琢磨（たくま）と、女子に囲まれている宮内君、もとい憲治（けんじ）とは、バスケの練習やら何やらを通して結構仲良くなった。

面白いし優しいし、かなりいい人達。何でも二人は幼馴染みで、ずっとバスケをしてきたらしい。その為か、一年の頃からスタメン入りしている。

「けっ、憲治の次は光かよ。ふんっ、どうせ俺は独り身ですよ」

琢磨はそう呟き、トボトボ教室に戻って行った。

正直に述べると（述べなくても）、琢磨もかなりの美男子だ。髪型は坊主に近いが、それはそれで格好いいと思う。

只、憲治と行動を共にしている為、比べられる事が多く、若干の劣等感を抱えているのかもしれない。

「鈴木君、拗ねちゃってるね」

月乃の言葉に頷きつつ、琢磨を眺める。すると、紫苑さんが寄り添って歩いていた。それも楽しげな表情で。

「青春、だねぇ？」

「うん、青春って感じだね」

笑いを噛み殺し、暫く、離れて行く二人を見続けた。

「そうだ、衣装取りに行こうよ」

危ない危ない。忘れる所だった。

「じゃあ行こっか」

目的地を第二特別教室、略して二特に変更し、並んで歩いて行った。

普段はＡＬＴ（現地出身の英語の先生）の授業で使う、ここ第二特別教室も今は……地獄……。

ドレスを取り合い叫ぶ女子。止めようと奮闘しているものの、逆に睨まれ、すくみ上がっている男子。

「凄いね……」

「……うん」

今からこの教室に突入しなくては、と考えると冷や汗が止まらない。

顔を見合わせ、同時にため息をこぼす。再び視線を合わせ、教室に突入。

騎士の衣装は簡単に手に入った。

しかし問題はこれから。そう、月乃のドレスだ。

目にも止まらぬ速さで取り、奪い、奪い返すという争いが、目前で繰り広げられているのだ。そう易々と手に入れさせてはくれないだろう。

目の前の光景に圧倒され踏み出せないでいると、月乃が果敢にも飛び込んだ。

「うぅ……光ちゃん……」

三十秒後、少しボロボロになり、瞳に涙を溜めた月乃が戻ってきました。

笑うしかない……。

結局、隅にあった紺色のドレスとその他諸々を適当に掴み、足早に教室を後にした。

途中、「こんな色嫌だよ……」怪訝そうな顔で月乃がぼやいていた。

月乃の気持ちは痛いほど判るが、仕方ないものは仕方ない。慰めつつ、教室へと歩みを進めた。

しばし歩き、クラスに近付くと何やら騒がしい。
疑問符が頭上に浮かんだもの、あまり考えずドアを開く。
――おにぎりが飛んできた。
間一髪でキャッチし、見ると今朝作ったもの。
何故？
視線を上げる。おにぎりが宙を舞っている。そして、おにぎりを取らんと目を血走らせた、我がクラスメイト達。
発生源はどうやら僕達の持って来た重箱みたいだ。そして、おにぎりを外へといざなっているのは……千智先生です。何してんのあの人？
「さあ皆、月乃ちゃんからの差し入れを食べて、午後も頑張るのよ！」
千智先生は、我がもの顔でそう言った後、更におにぎりを渡している。正確に言えば、投げている。しかし地面に落下するおにぎりはなく、全て生徒のお腹の中に消えて行く。
無駄にいい運動神経だ。他のことに使ったら、どれほどの結果が現れるのか見てみたい。
「こうなるとは思ってなかったなぁ……」

だよね。おかしいもの、この人達。だからこそ最高にして最低なんだけどね。

「僕達もご飯にしよっか？」

「うん、そうだね。だけどここだとちょっと……」

「……確かに。屋上行く？」

そうだねと苦笑いする月乃。するとせがむ様な表情になり、「ねえ光ちゃん、お弁当取ってきて」手を胸の前で組み合わせ、上目遣いでのお願い。

いやいや、自分で取って来ようよ。ねえ、そんな顔したって駄目なものは駄目だよ。……そんなに見ないで。……分かった、分かったから、取って来るからその目止めて！

小さく拳を握り締める彼女を横目に、後ろの扉から教室に入る。人垣を避け席に辿り着き、弁当箱を二つ取り出して教室を出る。

月乃に弁当箱を渡すと「光ちゃん……何か可愛かったよ♪」ですって……。

必死で取ってきて可愛いって……。男の子に可愛いは褒め文句でないことを、月乃は知っているのでしょうか？

それに今の科白は、僕が滑稽だったと言っているようなものだよね。意識して言っているのだろうか、はたまた無意識なのだろうか。前者も酷いけど、後者だったら質が悪い。恐らく後者だろうけど…

…。

落ち込む僕を尻目に月乃は軽やかな足取りで歩いて行く。

ちょっと、置いてく気？　僕がこんなに嘆いているのに、気にせず行ってしまうのかい？

心の叫びは聞こえない。彼女の後ろ姿は徐々に小さくなっていく。

……もう、いいや。

小さく呟き、後を追った。

屋上に設置してあるベンチに腰掛け、弁当箱を開く。定番の卵焼きと唐揚げ、健康を意識してか、野菜もふんだんにつかわれている。

本当にいい奥さんになれるよ。て言うか、僕の奥さんになって欲しい。

「またそんな事言って。……期待、しちゃうよ？」

おっと、また声に出してたか。気を着けな……ん？　期待しちゃうよ？　誰に？　僕に？

「つ、月乃、今何て？」

「なんだろうね？　教えてあーげない♪」

月乃はふふんとした笑みを浮かべ、お弁当に箸を伸ばしていた。
一体何なのでしょうか？　最近の月乃はあんな調子です。

食事後、クラスに戻ると朱音ちゃんが近付いてきて、「月乃、ドレス取ってきた？」と質問。
月乃は視線を落とし、紺色のドレスしか取れなかった事を告げる。
月乃が口を閉ざすと朱音ちゃんは待ってました、といった顔をし、紺色のドレスを掴むと月乃と何処かに行ってしまった。
「試合までには戻ってきてね！！」
「ふっ、それは保証出来ないぜ、光君！！」
そうですか……。流石、ミス、ゴーイングマイウェイさん。言動が全く読めない。
まあ、月乃がいるから大丈夫……なはず。
「光、次の試合はどんな感じで行く？」
「そんなの俺がシュートを決めま「はいはい、琢磨は黙る」
声をかけられ、振り返ると琢磨達。漫才の様なやり取りに笑みが

こぼれてしまう。憲治の毒のある言葉が結構ツボでありまして。

「光～最後は憲治、攻めなくていいよな～」

「いやいや、俺が攻めなかったら光や月乃さん、紫苑さんが頑張らなきゃ駄目になるだろ」

「おい、誰か忘れてはないか？」

「誰か？　……ああ、此所にいるお猿さんか」

むきゃー！　誰が猿じゃあ！！　と言って琢磨が憲治に飛掛かった。

琢磨……本当に猿になってるよ。それに憲治に躱されてうなだれてるし、周りの視線は冷たいし……どんまい。

琢磨が机に手をつき、「俺は憲治には勝てないのか」とぼやき始めた時、朱音ちゃんが戻ってきた。

「さあ、出陣だよ！」

帰って来て早々、出陣とは、やはり侮れない。

朱音ちゃんの先導のもと、体育館に向かう。

で、何しに行ってたのだろう？　月乃は戻ってきた瞬間に袋を鞄の中に押し込んだし、口元弛んでるし……。……謎だ。

体育館に着くとコートの周りを人が取り囲んでいる。とりあえず観衆の声に耳を傾けてみた。

「一組、頑張っ……いや、宮内君頑張って！」
「瀬川ナンテ呪ワレテシマエ……」
「月乃ちゃん、俺と付き合っ、いて！　何すんだよ！」
「猿琢磨、頑張れ」
「あっ、瀬川君！！　今日も一段と可愛いわ。ああ、もう、お姉さん、ダメになりそ♪」

この学校には、まともに応援しようと思う人はいないんかい。どんな学校だ。

この学校の未来に不安を抱き、試合が始まった――。

第１６話　溢れる情熱と迸る汗（後書き）

おはよこんにちこんばんは。一通りの挨拶を済ませた碧井です。

まず、後書きを語る前に言わねばならないことがあります。

投稿遅れてすいませんでした！

理由を上げるときりがありませんが、一番は“書き直し”にあるとふんでいます。実際は定かでありません。探偵の方がいらっしゃったなら、捜査していただけると嬉しいです。勿論、報酬はありません。

さて、つまり何が言いたいのかというと、プロローグ～第３話まで書き直しましたので、再び読んでいただきたいということです。はい。

厚かましいですが、宜しくお願いします。

第17話　雨雲の下で会議を

「フッフッフ」

「ハッハッハ」

「ワッハッハ」

天まで届きそうなほど、馬鹿笑いする男が一人。名を琢磨、又は猿という。

「キモいぞ、猿琢磨」

「見てみなよ、この周囲の冷めた目を。君ひとりが馬鹿笑いしてるから、他が喜んでいいかどうか困るんだよ」

「たっくうっさいな。そのままだと『この猿野郎、ちっとは黙ってやがれ！　それともあれか？　黙るということさえ出来ないほど、知能が低いのか？　だったら悪かった。謝るよ、知能ゼロの単細胞生物君』って言っちゃうよ」

憲治、僕、朱音ちゃんに罵倒を受け、落ち込むは琢磨。

そんな彼にとどめを刺したのは、紫苑さんのこのどすの利いた一言。

「琢磨さん……ちょっと黙ってろ」

その後、彼は窓から飛び降りようとしたが、止めてもらえず、シクシク泣き崩れていた。誰も宥めなかったために諦めて、ひとり膝を抱えていた。非常に切なげな表情であった。

僕達二年二組はバスケ優勝、ソフト、サッカー準優勝など、大いに活躍した。だが、他の学年にめぼしい活躍がなく、結果は第二位。

されど、体育祭は終わりではない。明日の“姫騎士”がある。

そして今、作戦会議中だ。

「私達は負けてしまった。二位だなんて意味を成さない。つまりただの負け犬だ。この状況を打破するためにも、明日勝たなくてはいけない。分かったかな諸君？　ということで作戦会議だ。いい策がある者は挙手して述べよ」

千智先生……盛り上がり過ぎです。そしてどこの上官ですか？　アメリカ軍大佐辺りですか？

「光ならば、敵陣を攻め敵の頭を取って来るのも可能であるかと」

「おい、猿。貴様、自分が何を言ってるか分かっておろうな？　貴重な戦力、それも最後の砦を無駄死にさせるなど、貴様如きがほざけるか！　身の程を知れ！！　貴様は呑気に懐に草履を抱えておれば良いのだ」

「それでは二十五人が攻め、瀬川殿を含む残りの十四人が春日姫君

を守るのは如何なものでしょう？」

「ほう、ポンカン、良い策じゃ。貴様等、それで行くが異論はなかろう？　ふっ、これであの今川に一杯喰わせられるというものだ」

武将だった。織田信長だった。豊臣秀吉だった。明智光秀だった。戦国の世に翻弄され、自らの正義を貫き通し、そして散って行った三人の武将がそこにいた。

いきなり現れた三人の武将を怪訝な表情で見つめる。一瞬、鎧を身に着け、戦法を語り合う武者が見えたが、瞬きするとなんともない。幻であったようだ。

隣りでピクリ肩を震わす月乃を見た。同じ幻を見たようだ。親近感が高まった。

それからも誰も突っ込まず、滞りなく作戦が決まっていく。驚いたのは上杉謙信が敵に塩を送ったように、敵におにぎりを送る作戦。本当に効果があるものか、明日に期待しよう。

「良し、こんなもんで大丈夫であろう。各自明日に向け休め。以上じゃ」

先生、いや信長の言葉にははぁーと頭を下げ、教室を出る。ブルリ寒気が襲う。時は五月下旬。寒いと感じたのは、それだけ熱が籠っていたということ。それだけ皆が団結していたということ。

これなら、明日はいい所まで行けそうだ。理由はなかったが、漠

然とそう感じた。

月乃と昇降口で靴を履き替え校門を出る。部活のある皆とは教室で別れたため、僕達二人での下校だ。

「光ちゃん、空……」

言われ、空を仰ぐ。朝より黒みの増した雲が浮かんでいた。

生憎傘は持っていない。月乃も首を横に振るばかりである。

雨に打たれては堪らない。早足になり、帰路を急いだ。

――ポツン

頬に水滴を感じ、見上げる。雨粒が目に飛び込んだ。

不味いと思ったのも束の間、雨が僕達を襲う。

咄嗟に月乃の手を掴み走り出す。その間も雨は僕達の体力と体温を奪っていく。

雲行きが怪しかったため、早足になったのが幸いし、一分足らずで家に到着した。

しかし僕達の体は冷えきり、風邪をひいてしまいそうだった。

お風呂を沸かし、月乃に薦める。彼女は僕に入るよう言ってくれたが、強引に脱衣所に押し込んだ。ふるふる震える彼女の姿が見るに堪えなかったのだ。

服を着替え、タオルで頭を拭いていると、月乃がお風呂から上がってきた。濡れた黒い髪をタオルで挟んで拭いている彼女が、とても色っぽかった。お風呂の神様がいるとしたら、彼女のようだろうと勝手に想像してしまった。

月乃と入れ替わりで入浴する。お湯で軽く体を流した後、浴槽に浸る。冷えた体が徐々に解きほぐされ、体内に血が巡った気がする。充分に体が火照ったのを感じてから、入浴を終えた。

リビングに着くと、ソファの上で自分を抱き締め小刻みに震える月乃が目に入る。例の如く熱を計ると少し熱い。微熱だ。

具合を尋ねると、大したことはないと笑顔を返したが、大事を取って寝てもらうことにした。明日のこともあるが、それ以上に彼女の苦しむ顔が見たくない。

月乃を自室に向わせ、飲み物片手に読書をする。内容が頭に入らず、文字の羅列をただ眺めていた。彼女が心配だった。

彼女の部屋の前で耳を澄ませ、寝息を確認してから床についた。僕の大半を月乃が占めていると知って、思わず赤面。暫く眠れず天

井を眺め、彼女との思い出を思い出していた。

いつの間にか瞼が下がり、気が付いたら朝になっていた。

昨日の天気が嘘のように、空は澄み渡り、朝日が眩しい。

かくして体育祭二日目、姫騎士の開催日は始まりを告げるのだった。

第１７話　雨雲の下で会議を（後書き）

はい、作者です。始めての方もそうでない方も、作者です。

皆さんは花粉症ですか？　作者は小学五年生から仲良くさせてもらっているので、かれこれ五年の付き合いです。

毎年、この季節は憂鬱なのですが、今年は酷いです。

通っている高校の真後ろに山があって、杉が植えられています。

はい、こんにちわですよ。

そんな訳で、学校が辛い作者でした。

因みに、第４話の光と月乃の話を編集しました。暇な人はどうぞ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1997d/

晴れ、時々嵐！？

2010年10月16日09時28分発行